
とある男のハーレム至上主義

トト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある男のハーレム至上主義

【コード】

N8088V

【作者名】

トト

【あらすじ】

年上大好き！そんな主人公がハーレムを作るために頑張る物語です。基本的に原作に沿って書いていきます。この作品は、作者の息抜きで書いています。よって誤字脱字が多くなると思います。期待せず読んでみてください。

『七月一九日』（前書き）

この作品は作者の息抜きで書いています。
期待せずにお読みください。

『七月一九日』

黄泉川愛穂と鉄装綴里は「警備員」アンチスキルの仕事で、第七学区を巡回中だった。その巡回の途中、通信が入った。内容は第七学区の路地裏で暴力事件が発生中のこと、現場近くの警備員アンチスキルは現場へ直行する、とのことだ。

「急ぐぞ。鉄装！」

「は、はいっ！先輩」

そして、二人が現場へ着くとそこには、「スキルアウト」と思しき少年が三人が山のように重なって倒れていて、そのうえに一人の少年が座っている。その少年は、黄泉川と鉄装を見ると、急に嬉しそうな顔になって話しかけてくる。

「あっ！愛穂それに鉄装さんも今日は遅かったですね」

「……はあ。またお前じゃん。それと呼び捨てにするんじゃないじゃん」

「ヒドイッ！あれほど愛し合った仲じゃないですか！」

「へっ！？せ、先輩！ほ、ほんとうですか!？」

「なに鵜呑みにしてるじゃん。鉄装。それと、でたらめ言うじゃないじゃん」

「いやいや。俺は愛穂さんのことを愛してますよ。あっ、もちろん鉄装さんも」

その少年はとても嬉しそうに話す。

「まったく、それより風紀委員ジャッチメントだからってやりすぎじゃん。今回もまた始末書書いてもらうじゃん」

黄泉川の言うとおり、その少年の腕には風紀委員ジャッチメントの腕章がつけてある。少年はその言葉でさらに顔に喜色を浮かべる。

「やった！これでまた、愛穂さんと一緒にいられますね！」

「まさかお前、そのために毎回こんなことしてるじゃん？」

「違いますよ。大切な愛穂さんに怪我されたら悲しいですからね」

その言葉に黄泉川はため息をつく。

「あれ？どうしたんですか。ため息なんてついて」

「ため息をつかずにはいられないじゃん。………って、そんなことよりちようど護送車が来たじゃん。さっさとそいつらを護送車に運ぶじゃん」

「了解です」

黄泉川の指示に従って少年は気絶している三人を一度に担ぐ。

「あ、相変わらず、すごいですねえ」

鉄装は感嘆の声をもらす。

「いやー。褒めないでくださいよ。そんなに褒められたら鉄装さんをデートに誘いたくなっちゃいますから」

「へっ！？こ、困ります！わ、わたしたち教師と生徒ですよ！？」

「いえ。愛に立場も年齢も関係ありません。グハッ！！」

突然、少年の頭がド突かれる。少年が振り返ると、黄泉川が拳を握っていた。

「さっさと運ぶじゃん！」

「あっ！もしかして、愛穂さんヤキモチやいてくれます！？可愛いー。愛穂さんめっちゃ可愛いーで。グハッ！！」

言い終わる前に、拳が再び頭部に直撃する。黄泉川はわりと全力で殴っているが、少年は気にもしていない。

「まったく。どんな能力じゃん。これでも結構本気で殴っているじゃん」

「教えて差し上げましょう。俺の能力は『恋愛浪漫』ラブロマンスです。その能力は、愛する人をロマンチックな桃色空間へといざなう。男にとつては夢のような能力なのです」

「冗談はいいから、さっさと運ぶじゃん」

「愛穂さんも俺と恋愛浪漫ラブロマンスしましょうよ」

少年は楽しそうに、担いだ少年たちを護送車に運ぶ。そして三人を担いだまま、護送車の中に入って気絶している少年たちを護送車内の席に座らせる。三人を座らせると、少年は外に出ようとするが

ガシャン！！

少年が外に出る前に護送車の後ろのドアが閉められる。

「えっ？あ、愛穂さんこれは……？ああ。わかりました新手のプレイですね。ふっふっふ。大丈夫です安心してください。貴女が望むならどんなプレイにだって答えられます！」

「大丈夫じゃないのはお前の頭じゃん」

「え？違うんですか？」

「当たり前じゃん」

黄泉川はそこで頭を抱える。この少年はどつやら本当にそう思っていたようだ。

「お前を前の席に乗せると、運転手を口説くじゃん」

「当たり前です！！そこに美しい女性ひとがいるのに口説かないなんて、

僕にはできません！………ってことは、今日の運転手は女性。誰ですか教えてください！」

「教えるまでもないじゃん」

その言葉と共に、護送車のエンジンがかかる音がした。

「待ってください！せめて、せめて名前を！あとは想像で何とかしますから！」

少年の叫びむなしく護送車は黄泉川から離れて行く。

「って、ことがあったんだけど、愛穂さんひどいよね」

場所が変わって、風紀委員の第177支部駐屯場。

「ねえ〜。話聞いている美偉ー」

「心底どうでもいいわね」

少年と同じ風紀委員第177支部所属の固法美偉は、ため息をつきながら答える。

再びジャンプする。

「わからないのか。年上の女性が小さい胸を手で隠しながら」「ごめんね。あなたより年上なのに、こんなに小さくて……」「……ぐはっ！な、なんだ！この破壊力は！やっぱり年上は最高だ。ほら、想像してみるよ。白井」

「……………た、確かに！？こ、こんなことをお姉様に言われたら、言われたら、わたくしわたくし……！」

「いや、あんな「つるぺた」に興味ないし」

「なんですってえー……！わたくしのお姉様にいいいいいい……！」

白井は少年の頭の上で連続ジャンプを繰り返す。それでも少年は平然としている。

「あなたたちの話はどうでもいいけど。天野君の能力は気になるわね。結構一緒にいるけど、わたしも知らないし」

「そうですね。それはわたくしも気になる場所がありますの」

ようやく少年　少年の名字は天野というらしい　の上でのジャンプを終了し、白井が固法に同意する。

「美偉にはいいけど、黒子はなあ」

「どうやらまた踏んでもらいたいようです。ゲス先輩、あなたはどこまでゲスなんですの」

「ホントに年下には興味ないから。まあ、ぶつちやけると俺、無能力者だし」

「うそ（ですの）」

固法と白井の声が重なる。

「ホントだって、俺、嘘もついたことないもん」

「うそ（ですの）」

「そこまで言わなくてもいいと思うぞ。美偉」

「なぜわたくしを無視するんですの……！」

「黙れガキが」

「キイイイイ　　！！許せませんの！」

白井が再び戦闘態勢に入るが、やはり天野は気にしない。その様子を見て、固法はため息をつく。ハッキリ言っこんなことを、毎日繰り返されると注意する気力も無くなるというものだ。

「はあ……。それが終わったら始末書書いてね。白井さん貴女も始末書溜まってるのよ」

正直、今は連続虚空爆破事件の後始末や、急に強度が上がった能力者が問題を起すなどの事件が起きているので、色々と手いっぱいな状態なのだが……。

『七月一九日』（後書き）

一応、主人公の名前は天野です

『七月二十日?』

「暇だ」

「暇ですの」

「スピー〜イ」

「なあ、黒子。なんでこの「つるぺた」寝てるの?」

「「「つるぺた」ではなく、わたくしの愛しのお姉様ですの。……………お姉様は、どつかの「お馬鹿さん」と一晩中追いかけてこしていたらしいんですの」

「「お馬鹿さん」ねえ……………」

天野はそこで大きく欠伸をした。現在、天野、白井、そして白井の愛しのお姉様である御坂美琴は、病院の待合室にいる。理由は、今朝かかってきた電話にある。電話の内容は、連続虚空爆破事件グラビトンの犯人が意識不明になった、というものだった。そして天野たちはその調査の報告を待っているのだ。

「なあ、黒子」

「なんですの」

「今から面白い話していい？」

「わざわざ自分でハードルをあげる意味はあるんですの？」

「いやー。正確には俺がキレた話なんだけど、まあ、傍から見れば面白い話だと思つぜ」

「はあ。わかりましたの。どうせゲス先輩の話なんて、面白くないとはわかっていても、聞いて差し上げますの」

白井はやれやれ、といった感じに両手を肩の高さまであげる。

「このガキ、ブツ飛ばすぞ！と言つのがいつもの俺だが、割とこの話をしたので我慢してやるぞ。このクソガキが！！」

「我慢する気がないのは、わかりましたの……………」

天野は一通りいつもの流れを済ませてから、話を始める。

「まあ、今日の朝の話なんだけどな。俺がいつものように起きたんだよ。で、いつも通りベットの中で、あゝ。風紀委員ジャッチメントやめたいなあゝ。でも、やめたら美偉や他の年上のメンバーに会えないしゝ。でも、やめてできた時間で新しい女性に会えるかなあゝ。つて、思つたときなんだけどな」

「まさか毎朝そんなことを……………！？」

「当たり前だろ。で、その時、隣に住んでいる敵の部屋から」

「敵って……。まあ、ここを突っ込むと話が進まないの、我慢しますの」

白井はこれだけでも、十分面白い話なのではないかと思う。しかし、天野はそれを気にせず話を続ける。

「ああ、敵って言うてもライバルっぽい敵だから安心してくれ。で、その敵の部屋から叫び声が聞こえたわけよ。まあ、いつものことだから、どうせ物に足の小指をぶつけて、そのとき携帯とか落としたりやって、なんなら液晶とか割れてるんだろっなあく、って姿が手に取るようにわかったんだけどさ」

「予知能力でも持っていますの!?!」

「言ってなかったか？俺の能力は『被害妄想』^{ドッキリカメラ}って言って、近くにいる人間が困ることや驚いたことが起きる未来が見えるんだぞ」

「昨日は無能力者って言ってましたの……」

「あれ？そんなこと言ったっけ？」

白井の追及するが、天野は首をかしげる。どうやら本当に覚えていないようだ。

「……どうぞ、そのまま続けてくださいですの」

追及を諦め白井は、ため息をつく。天野は何事もなかったように話を再開する。

「いいならいいけど……？まあいいか。で、きつとなんだかんだあ

って、女の子を連れ込んでるんだろうなあ、って予想して、そのま
たなんだかんだでその女の子が全裸にされちゃうんだろうなあ〜と
予想したからさ、とりあえず身支度してから部屋に行こうって決め
たんだよ」

かなりマズイことを言っているのに、気付かない天野はそのまま話
を続けようとする。続けようとするが白井がここでようやくツッコ
ミを入れた。

「ちょっと待ってくださいですよ！？なんで急に女の子が出てきて
で、その女の子が急に素っ裸になっていますの！？」

「おかしなこと言ったか？よくあることだろ」

「気付いていない！？しかも、よくあることって！？」

白井は顔に驚愕の色を浮かべる。ここまできても、天野は事の重大
性に気付いていない。

「まあ、何を怒っているかわからないけど、話を続けてもいいか？」

「……女の子の話はあとで、聞かせてもらいますの」

「じゃあ続けるぞ。で、身支度が終わったから敵の部屋に行ったん
だよ。するとそこには」

「そこには……！」

「銀髪のシスターがいたんだよ。で、俺はこう叫んだんだ。『なん
でシスターが「つるぺた」のガキなんだよおおおおお！』って

な」

「ツツコムところはそこでは、ありませんの!!」

「なんでだよ！わからないのか、シスターってのはこの学園都市にとっては希少な存在なんだぞ！モン　ン風に言うなら、銀リオだぞ。あつ、女の子だから金リオか……。そのシスターが、そのシスターが、なんで「つるぺた」なんだよ！あり得ないだろが！いや、年上なら許すさ、でもな、でもガキじゃダメだろ……!!」

「だからそこではありませんの！銀髪シスターが何でゲス先輩の敵の部屋にいたかですの!!」

「それくらい普通だろ。でな、シスターって言うのは禁欲の象徴だろ。清楚、純潔、そういった単語であらわされるはずだ!」

「普通で流さないくださいですの……。確かにイメージとしてはそうですの」

今の天野にツツコミを入れても無駄だと悟った白井は、とりあえず天野の話最後まで聞くことにした。

「だろ！だが、だからこそ、その禁欲の象徴たるシスター、そのゆつたりとしたシスター服でも隠しきれない大きな胸。そして、隠されているであろうすらつと伸びた綺麗な足。表に出していないのににじみ出る魅力。その背徳的なまでの魅力がシスターの売りだろうがああああ!!!」

「ゴガアツ!!!」

「ここは病院ですの。お静かに」

白井は、突然叫び出した天野の頭にドロップキックを決める。天野は、その衝撃で顔面から病院の床に激突する。白井はドロップキックを決めた後でも、その頭からどかない。

「悪かった黒子。確かに「つるぺた」のシスターも萌えるけどな。あつ、もちろん年上限定だぞ。期待するなよ黒子　　グシャッ
！！」

天野はその状態でも平然と話しだした。白井はその天野の頭の上で全力のジャンプを決める。

「ゲス先輩の話はもう充分ですの。そろそろ、調査のほうも終わるようですし」

「ええ〜。ここから盛り上がる予定なんだけど。アレだぜ、ライトノベルにしたなら、番外編とか合わせて、二十巻以上の超大作だぜ。なんなら、タイトルに新約とか着いちやって、すくなくとも、二十巻は出るぜ」

「どうして、今朝だけの話で、そんな超大作ができるんですの？」

「いや、だから予定だって。これから面白くなる予定」

「どうでもいいですの」

天野の話を取り合わず、白井は頭の上でもう一度ジャンプしてから降りる。白井は寝ている御坂を起す。そして、御坂がちょうど起きたのを見計らったように、病室から調査団が出てきた。天野はその調査団の一人に目をつける。……………正確には一人の女性（年上）だ。

「君たちが担当の風紀委員か？私は木山春生だ。大脳生理学を研究している」

「やったあああああああああ！！」

突如の響き渡る大声に、周りの視線が集まる。その視線の中心にいるのは、言うまでも無く天野だ。

「……どうしたんだね。彼は？」

「気にしないでくださいです。ただの持病ですの」

「そうです。気にしないでください……」

白井と御坂はフォローを入れるが、これで挽回できるとは、思えない。

「木山さん。いえ、春生さんと呼ばせてください」

「……ん？別にかまわないが……どうしてだい」

「春生さん好きです。僕と結婚を前提に　　グハツ！！！」

天野の頭に、白井と御坂のハイキックが炸裂する。それでも天野は平然と立っている。普通の人なら脳震盪で倒れているだろう。

「大丈夫なのかね。彼は？」

「「気にしないでください（！）……」」

木山の疑問の声に、二人の声が重なる。

「……大丈夫じゃありません。だから春生さん看病してください」

「私は医者じゃないから治す事はできない」

木山は、天野からのアプローチにやや天然の入った返事を返す。

「黒子。私、この人このクズに似てるなー、って思っちゃったんだけど……」

「残念ながら黒子もですの……」

二人は残念そうなため息を漏らす。この間も天野は木山へのアプローチを続けているが、どれもが若干天然っぽい返しでかわされている。

「それにしても……暑いなここは」

今日は真夏日のだが、なぜか病院内はクーラーがついていない。近くを通った看護師に尋ねると、どうやら昨日起きた落雷が原因のようだ。

「落雷が原因だってさ。「つるぺた」」

「「つるぺた」って言うなっ!!」

御坂は、一瞬、雷撃を飛ばそうとするが、病院内であることを思い出して我慢する。天野が御坂をからかっている間に、白井は木山に『レベルアップバー幻想御手』について話している。『レベルアップバー幻想御手』とは、最近噂が出

回っているもので、それを使用すると能力の強度レベルが上がるといって、能力者にとっては夢のような道具らしい。

「それだけでは、何とも言えないな」

説明したのだが、どのような物かも使用方法もわかっていないものを、うまく説明できるはずもなかった。

「確かにその通りですけど、植物状態の人間の中には使用したらしい人もいますからね」

一通り御坂をからかい終わった天野も、木山との会話に参加する。

「そうか……」

シユル。

誰かが服を脱いだかのような、布がこすれる音がした。その音源を捜すとそこには、なぜか着ていた白衣とワイシャツを脱いだ木山春美の姿があった。

「ふう……暑い」

「なにしていますの　　ッ!？」

白井は、いきなりストリップを始めた木山を注意しようとするが、今はそれより危険な生物と一緒にいることを思い出す。その生物の動きを止めるべく白井と御坂は、アイコンタクトを交わす。この間、約一秒弱。そして行動に移すが時すでに遅かった。その生物は二人のアイコンタクトよりも早く動き出していたのだ。

「ダメですよ。春生さん人前で素肌を晒しては」

「私は特に気にしないのだが」

「それでもです」

「下着をつけていてもダメなのか」

「ええ」

天野は、実に紳士的な動きで木山のワイシャツのボタンを閉めて行く。その行動に、白井と御坂は動けなくなる。

「貴女のように美しい女性がそう簡単に下着を見せてはいけませんよ」

「美しい？」

「ええ。だから俺のためだけに見せてください！他の人間に見せるなんて耐えられません！つてことで結婚を前提に
グギヤ
ア！！」

再び天野の頭に二人のハイキックが決まる。

「見直した私がバカだったわ」

「激しく同意ですの」

「……面白いな彼は。それより場所を移そう。話はそこでするとし

よう。もちろん冷房のきいた場所だね」

木山が部下たちに一通り指示を与えるのを、待ってから木山を含めた四人は病院の外へ出た。

『七月二十日?』

とある喫茶店の一角。その場所には、なぜか重苦しい空気が漂っていた。その重苦しい空気の中、木山春美が重々しく口を開いた。

「同程度の露出でも、なぜ水着がよくて下着はダメなのか」

「やはり、見れるチャンスとの差ではないでしょうか」

それに続いて、天野ももったいぶった口調で話し始める。

「いや、そっちではなく」

「アレ?」

御坂と白井のツツコミに二人は首をかしげる。どうやら二人は、真剣に下着と水着について話すつもりだったようだ。

「ああ〜! 思い出した! 俺と春生さんの結婚式をいつにする
グエエ!」

隣に座っている白井が、天野の足を思いっきり踏みつける。

「その話でもありませんの」

「まったくよ。『レベルアップバー幻想御手』についてでしょ」

この手のことに、やる気がない天野は注文していたパフェを一人でつついている。その間に白井と御坂が木山に『レベルアップバー幻想御手』についての情報を話している。ちなみに天野が注文したパフェは、カップル限定のパフェで注文すると、恋人と記念写真を撮ってもらえるというサービスがついている。天野は、木山に頼んでツーショット写真を撮ってもらおう予定だったが、白井と御坂に邪魔されて天野の顔は映らなかった。

「事情は大体把握した。つまり、ネット上の噂にある『レベルアップバー幻想御手』。もしそれが見つかった場合は、私に調査して欲しいと」

「はい」

「構わんよ。むしろこちらからお願いしたいくらいだ」

と、話が決まったところで、天野が話に参加する。

「やっと、難しい話が終わったところで、俺様参加！と、言いたいところだけど、なんでこいつらがいるの？」

天野はガラス張りの壁を指差した。そこには、見知った顔が二つ。

「へー。脳の学者さんなんですかー」

見知った顔は、風紀委員の後輩である初春飾利とその友達である、佐天涙子だった。二人も話に参加する。

「で、なんでその脳の学者さんとお話を。天野先輩の脳に何か問題でも」

「ああ。だから、俺は春生さんと二人つきりでお話しする予定だったのに……。このクソガキふたりが邪魔を……！」

「あれ？いつも通りの先輩ですね」

「いつも通りだから困っておりますの」

初春は天野の言葉を華麗にスルーする。風紀委員に入ってから、一緒に仕事をしている仲である。これぐらいのスルー能力は身につけているのだ。

「そんなクズはほっとくことにして、私たちは『レベルアップ幻想御手』について話をしてたの」

ずれはじめた話題を御坂が本題に戻す。

「『幻想御手』ですか？それなら私「ええ」」

「『幻想御手』の保持者を見つけ出して、保護することになると、思いますの」

喋り出そうとした佐天の口が止まる。そして、自分のポケットに入っているであろう『ソレ』をズボンのポケットの上から握りしめた。

「なぜですか？」

「調査中ですので、ハッキリは言えませんが、使用者には副作用があるらしいんです。さらに力をつけた学生が事件を起こすケースも多発していますの」

「はー……？　そう言えば、佐天さんさっき何か言おうとしてませんでしたか？」

「な、なんでもないよ！？」

初春が佐天に尋ねると、佐天は誤魔化すように両手を大きく振った。ちょうどその手が近くにあった、コップに当たりコップの水がこぼれる。その水が木山のスカートにかかってしまった。

「わ　　！　ス、スイマセンッ」

「いや、気にしないでいいよ。スカートにかかったただけだから、脱いでから、おいておけばすぐに乾くだろう」

そのまま木山がスカートに手をかけ、脱ごうとするが、それよりも早く天野が動く。

「ダメですからね」

「？」

木山はクエスチョンマークを浮かべている。どうやら本気で理解していないようだ。

「人前で脱いじゃダメですよ」

「しかし、起伏の乏しい私の肢体を見て劣情を催す男性がいるとは………」

「ここにいます」

天野は笑顔で答える。そんな天野を見て、初春と佐天は驚きのあまり、動きが止まってしまっている。

「さ、佐天さん」

「な、何かね初春くん」

「あれは、間違いなくあ、天野先輩ですよね……！？」

「私の目にもそう映っているよ……！？」

驚いている二人を見て、御坂と白井はため息をつく。この間抜けな姿を、病院で曝していたかと思うと、恥ずかしくなったのだ。そこで二人にフォローを入れる。

「安心なさい。あのクズはすぐにぼろを出すわ」

「その通りですの」

「「へ？」」

「そんなことも出来るんですの？お姉様」

「ええ。電気分解でも乾くはずでしょ」

「ああー。確かにそれなら何とかありますね。さすがですね御坂さん」

初春が御坂を褒めた。その言葉に佐天の肩が一瞬、ビクリと震える。

「そんな面倒くさいことしなくても、俺に任せろよ」

いつの間にか復活していた、天野が立ち上がり木山に近付いた。そして、木山のスカートの濡れている部分を手で撫でる。

「よし。これでどうですか春生さん」

「ん？乾いている……」

木山がその場所を触るが、スカートは乾いている。

「あんたの能力っていったい何なのよ」

御坂が怪訝そうに尋ねた。それに白井と佐天が同意の意味を込めて頷いた。

「俺の能力は『体温調整』^{アップダウン}って言って、自分の体温と触れているものの温度を操れる能力だよ。確か最高は百度までで、最低がマイナス十度までだったかな。それを使って、水を蒸発させたんだ」

「あんだ。絶対嘘でしょ、それ」

「今朝と言ってることが違いますの」

「天野さんの言ってることは、信じられないんですよ」

天野が答えるが、三人は信じようとしない。日頃から嘘ばかりつくので、お話の最後の狼少年のような状態になっているのだ。

「天野先輩は、何度聞いても教えてくれないんですよ。能力。私も調べてみたんですけど、全然分からないし」

「初春の情報処理能力で分からないとなると、ますます謎が深まってきますの……」

初春の言葉に、白井は頭を抱える。彼女の情報処理能力が高いことは、普段から一緒に行動している白井は知っているのだ。

「おい。もうお話終わったのか？そろそろ店を出ないと、迷惑だぞ」

天野の言葉に、四人が辺りを見回す。すると、店内の視線がこの一角に集まっている。……まあ、先ほどからこれだけのバカ騒ぎをしていれば、視線が集まらない方が不思議だろう。四人は、天野と木山を連れて、そそくさと店を出る。もちろん会計は済ませた。

六人は店外へと出た。

「今日はお忙しい中、ありがとうございました」

白井が木山に礼を言う。

「春生さん。今度はぜひ二人つきりでお食事しましょう。それとも、デートがいい　あばばばっ!!」

「ホント、このクズが迷惑かけました」

店外に出たことで、能力を遠慮なく使える御坂は、天野に電撃を浴びせながら頭を下げる。

「いや、こちらこそ色々迷惑をかけてすまない。だが、彼との会話は面白かったよ。それに教鞭をふるっていた時を思い出して、楽しかったよ」

「教師をなさってたんですか？」

「昔……ね」

どこか暗い雰囲気を感じさせる言葉を残し、木山は天野たちから離れて行く。

「なんつーか、ちょっと変わった感じの人よね」

「常人と違う感性が天才を生むんですわ」

二人は納得した感じで頷く。そんな二人に文句をあげる人間が一名。

「おい「つるぺた」二人組。お前らのせいで、俺と春美さんの、きやっきやっ、うふふ、なデートが台無しじゃないか！」

「「つるぺた」ではありませんの。それと、どこがデートだったんですの?」

「「つるぺた」言うなっつうの!」

御坂が再び電撃を浴びせようとするが、そのとき、髪の毛の一房がセンサーのように反応する。

「あっ!ちよろっと、用事を思い出したから、今日のところは勘弁してあげるわ!」

御坂はそう言うと、すぐさまセンサーが反応した方へと物凄い速度で行ってしまった。

「お姉様。どんな用事ですの!??」

白井は頭を抱えながら叫ぶ。どうやら、頭の中には様々な妄想が渦巻いているようだ。そんな白井を無視して、天野もどこかへ行ってしまった。

「騒がしいかったですね。佐天さん」

「そつだね」

「そう言えば、佐天さん見せたいものって……?」

「あつ!? えーと……。ゴーメン! 私も用事があったの忘れてた、また今度ね!」

「はあ……」

佐天はそれだけ言うと、走って帰っていく。初春は、それを見送っている。

とある公園。初春たちのところから、逃げるようにここまで来た佐天は、息を整えるために、立ち止まる。

「るーいーこーちゃん。あーそーびーまーしょ」

突然名前を呼ばれた佐天は、後ろを振り返る。そこにいたのは、先ほどまで一緒にいた天野だ。

「あ、天野さん。ど、どうしたんですか……?」

いつも通り接しようとするが、うまくいかずしどろもどろになってしまう。顔にも気まずさが出ているだろう。

「うーん。まあ、どっちでもよかったんだけどね。でも、一応、涙子ちゃんのご好意に思っているし、あっ!この好意的は子どもをあやす感じね。俺がラブなのは年上限定だから。っと、話が逸れたね。で、俺も原因の一端を握っているから、ちょっと助言をしない来た感じかな?」

「じよ、助言ですか?」

「うん。助言だよ助言。人生の先輩の言葉をしかと聞け!!」

芝居がかった仕草で、天野が変なポーズを決める。

「なんなんですか?そのポーズ」

「いやー。俺ってシリアス苦手だから、ちよつとでも楽しい雰囲気にしようかと」

「ふふつ。天野さんってやっぱり面白いですね」

ここにきて佐天の顔に笑顔が戻る。

「涙子ちゃんさー。『能力なんて関係ないって、言うやつはいつだ

「って能力者だ」って、思ってるでしょ」

その言葉に、佐天の顔が笑顔のまま凍りつく。言い返そうとしても、のどが言葉を発してくれない。

「俺も一応能力者だしー。どうしても上から目線になるのはしょうがないけど、助言をしてあげよう。『能力は関係あるよ』」

天野は、残酷な事実を告げているのに、その顔も声もいつも通りで何も変わらない。それが逆に、佐天を動けなくさせる。

「能力は関係あるよ。『自分パーソナルリアリティだけの現実』。能力を発動するには、自分だけが認識している世界つてのが必要だからね。つまりそれは、人格の形成において重要な部分を占めてるってことだ」

「ど、どうしたんですか？きゅ、急に……？」

佐天はそこでやっと、言葉を返せた。

「ん？どうしたんだろうね？まあ、気にせず聞いてよ。無能力者にとつて、能力がないことが現実だ。その現実が人格の形成に関わるようは、無能力者は少なからず、能力者に対して、劣等感を感じるってことだね」

「……つまり私みたいな無能力者は、劣等感を感じるしかないってことですか」

「そう。そのとおり。でも、感じるしかないっていうわけじゃない。ちゃんと自分で整理できる人間もいる。……できない人間は、今の涙子ちゃんみたいに『ソレ』に頼ったりするんじゃないかな？」

その言葉を聞いて、佐天はポケットの中の『ソレ』を握り締める。

「な、なんのことですか!？」

「ああ。大丈夫だよ。俺はそれを咎めに来たわけじゃない。むしろ逆かも」

「逆?」

「そう逆。俺としては、涙子ちゃんにそれを使って欲しくはない。でも、涙子ちゃんは使いたいだろう。俺は止めに来たんじゃない。ちゃんと考える時間を作りに来たってところだね」

「時間?」

佐天は天野の話がいまいち理解できていない。てっきり『コレ』を持っていることを、咎められると思っていた。

「ちゃんと考えて使わないとね。『ソレ』には、副作用があるし。もし、使うなら自分の意思で使うんだよ。誰かの所為にしちゃいけない」

「……………あはははっ。天野さんには全部お見通しなんですな」

佐天は乾いた笑いをもらす。天野はそれを気にせず、いつもの調子で続ける。

「俺の能力は『ディアフレン下以心伝心』って言って、俺に好意やプラスの面に分類される思いを持っている人の心を感じ取れる能力なんだよ」

「ふふっ。さっきと言ってることが違いますよ」

「あれ？そうだったけ。俺物忘れが激しいから」

「そうですよ。……でも、なんで止めないんですか？」

佐天は不思議そうに尋ねる。

「いやいや、俺は「ヒーロー」でも「悪党」でも、ましてや「チンピラ」でもないからね。勧めることも、止めさせることもしないよ」

「ヒーローと悪党は分かりますけど、チンピラってなんですか？」

「んん。そのうち現れるであろう世紀末帝王の前の職業」

「あははははっ。な、なんですかそれ！あはっ、あははははっ」

佐天はお腹を押さえながら笑う。どうやら笑いのつぼに入ったようだ。

「うんうん。よかったよかった。涙子ちゃんには、笑顔が似合うよ。じゃあ、ちゃんと考えて使うんだよ。ばいちゃー」

最後まで、ふざけた調子のまま天野が去っていく。ようやく笑い終えた佐天は、笑いすぎて出た涙をふく。

「うーん？なんで天野さん今日は、涙子ちゃんって呼んだんだろ？いつもは呼び捨てなのに？」

それが彼なりの気遣いなのだが、日頃ふざけ過ぎているために、あまり意味がなかったようだ。

『七月二十日?』

「なんで、こんなことになってんだよおおおおお

!!!!」

天野は自分の住む寮の廊下で叫んでいた。

「アレか。アレの所為か。俺が柄にもなく年下を励ましたのがいけなかったのか……! ? いやいや、それだけで、こんなことに、なるってどういうことだよ! なんでなんで! ? こんな俺の敵の仕事だろうがあああああ! !」

天野はさらに叫ぶ。傍から見れば変人どころの騒ぎではないが、彼を責めないであげて欲しい。これには理由があるのだ。

「すみませんすみません。許してください。俺は年下になんてこれっぽっちも興味はありません。アレはちよつとした気の迷いです。俺は年上一筋です。年上がいれば生きていけます。だからだから許してええええ! !」

天野は自分の寮の廊下で土下座までしている。もう完全に危険な人間だ。

「……………ふう。ちよつとトリップしちゃったぜ。じゃあ、そろそろ現実逃避は止めにするかな……………。はあ……………」

ため息をついてから天野は立ち上がった。そして目を背けたい現実へと目を向ける。

「状況説明開始。目の前に血まみれの「つるぺた」シスター（年下）が倒れています！状況説明終了！」

その言葉通り目の前に、血まみれのシスターが倒れている。あと数メートル歩けば、自室に辿り着けるというのに、その前には逃れようのない現実が横たわっている。掃除ロボットの姿が見えないので、切られてすぐかどこかから移動してきたのだろう。

「ちゅーか、これだがやったの？」

「うん？僕たち魔術師だけど？」

コツコツと非常階段を上ってくる足音が聞こえる。天野がそちらを振り向くと、そこには二メートル近い男が立っている。

「ストップ！」

「うん？どうしたのかな？」

近づいてくる男を天野が叫んで止める。

「それ以上近づくな」

「なんだい？怖いのかい？」

「質問なんだけど歳いくつ？」

「うん？十四だけどどうしてだい？」

男が疑問に思いながら答える。その答えに天野は絶望の表情を浮かべる。

「終わった。なんでだよ、なんでなんだよ。たとえお前が男装の麗人っぽい設定でも、年下じゃねえかあああああああ！！！！！」

「……………」

「ありねえだろ。なんで俺が男の相手をしなきゃいけないんだよ。野郎なんて興味ねえんだよ。こんなの俺の敵の仕事だって何度言えはわかるんだよ……………！」

天野は再び廊下に跪く。そして、廊下をバンバン叩いて嘆いている。

「そろそろいいかな？一応名乗っておくよ。ステイル「マグヌスと名乗りたい所だけど、ここはFortis931と名乗っておこうかな。それじゃあさようなら」

「ちよ、ちよ、待って　！？」

天野がステイルを止めようとするが、ステイルは手を振りかぶる。

「炎よ　　巨人に苦痛の贈り物を」

ステイルが何かを唱えると、その手炎剣が出現して天野に襲いかかる。そして熱波と閃光と爆音と黒煙が吹き荒れた。

「やりすぎたか、な？」

確かめる必要もないほどの熱量だ。撰氏三千度の炎が直撃して生きていられる人間などいない。

「残念だったね。君がここにいたのか知らないけど、こんなことで命を落とすなんて、ついていなかった、としか言えないね」

「残念ながら、俺はこんなことじゃ「死ねない」ぞ」

「なっ!？」

爆心地のから声が響く。その声の主は言うまでもない、ステイルは天野を狙って炎剣を振り下ろしたのだ。ならばそこにいるのは天野しかない。

「どうやって!？」

「んん? いやー、俺の能力は………、って魔術師に言ってもしよ
うがないな。まあ、自分で考えてくれ、俺は野郎に優しく説明して
やるほど、いいやつじゃないんだ」

平然と喋っている天野は、やけど一つ負っていない。しかも、服にも焦げ目すらついていないのだ。

「ちっ!」

ステイルが再び炎剣を出そうとしたとき、チーンとエレベーターが
開く音がした。ステイルと天野がエレベーターに視線を向ける。

「あれ？なにこの状況」

「ヤッホー。俺の敵。実は斯く斯くしかじかで」

「なんだって!？」

どうやらそれだけで話が伝わったようだ。天野の敵　上条当麻
は右手を構えて臨戦態勢をする。ステイルは右手を構える上条を睨みつける。

「……なんだい？君も関係者何かかい」

「うるせえんだよ!」

「おーい。盛り上がってるそこ悪いけど、上条あとは任せていい？俺はやる気でないんだけど……。インなんとかさんは、俺が面倒みてやるからさあ」

「……わかった。インデックスは任せるぞ天野!」

それを受けて、天野は血まみれのインデックスを背中に背負った。

「ちつ。勝手に話を進めないで欲しいね。そちらの彼の能力は、よく解らないのでね。まずか君から炭になってもらおうよ!」

ステイルは炎剣を再び出現させ、上条へと斬りかかる。

「なっ!？」

しかし、ステイルの炎剣が上条の右手に触れた瞬間、ガラスが割れ

るような音と共に消え去った。

「悪いな。お前の攻撃は俺にも効かなかったみたいだぜ」

「……………」

ステイルは声こそ荒げていないが、明らかに動揺しているようだ。上条が一步進むと、ステイルは一步下がる。しかし、後ろにも炎剣が効かなかった天野がいるので、何時までも後退するわけにはいかない。ステイルは覚悟を決めたのか、何かを詠唱し始めた。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり

その名は炎、その役は剣

顕現せよ、我が身を食らいて力と為せ

ッー!!」

唱え終わった瞬間、ステイルの胸元が膨らみ、服の中から炎が出現した。その炎は『芯』を持っていて、まさに炎の巨人といふべき存在だった。その巨人の名前は『インケンティウス魔女狩りの王』。その意味は『必ず殺す』。『魔女狩りの王』は上条に襲いかかる。上条は、炎剣と同じ様に右手を使って巨人を消し飛ばした。

「ッ!？」

しかし、消し飛んだはずの『魔女狩りの王』は、次の瞬間には再生して先ほどと同じ場所に、先ほどと同じ様に立っている。

「ルーンか」

「ッ!！」

響く天野の声。その声を聞いた瞬間、ステイルは喉が干上がるような感覚に襲われた。

「『神秘』『秘密』を指し示す二十四の文字だな。ゲルマン民族により二世紀から使われている魔術言語で、確か古代英語のルーツとされているはずだ」

「な……、」

上条もステイルのように、硬直する。そこに立っていたのは、こんな場面ですら真面目にやることのない、クラスメイトだ。しかし、彼の口から紡がれる言葉は、彼のイメージとはかけ離れている。それこそ、硬直して動けなくなるほどに。

「これだと『魔女狩りの王』を消しても無駄だな。そいつを消すには、この辺りに貼りまくってある『ルーンの刻印』を消さなきゃだめだ」

「お、まえ、天野、だよ、な……?」

「って、後ろのインなんとかさんが、おっしゃっています!」

上条が尋ねると、天野はいつもの様子を取り戻した。それを聞いて上条は落ち着きを取り戻す。確かに魔術に関係しているインデックスなら、知っていてもおかしくないだろう。それに伴いステイルも息を吐く。これだけ短時間で、ステイルの術式を解析できるような人間が『彼女』以外にいるとなれば、事態はかなり変わってくる。

「それならここは上条に任せるわ。俺がルーンを何とかして来てやる」

「行かせると思っかい」

動き出そうとする天野にステイルは炎剣を突き付ける。

「俺は野郎に迫られる趣味はないぜ」

天野は、インデックスを背負ったまま「飛び」おりた。ちなみに今いる階は七階である。まともな人間が生きていられる高さではない。

「なっ!?!」

ステイルが身を乗り出して、二人の様子を確かめる。上条も同じように身を乗り出している。地面を見ると、そこで天野が平然と手を振っていた。

「……………でたらめだね、彼。君は何か知っているのかい？」

「俺も聞きたいくらいだぜ」

上条とステイルは再び向かい合う。ステイルとしてはすぐにでも『

彼女』を追いかけたいが、目の前の上条がそれを許しはしないだろう。それに、天野はルーンをなんとかすると言った。つまり、まだここから離れはしないということだ。ならば、目の前の上条をすくにも倒して探しにいけば十分間に合うだろう。

「行け！『魔女狩りの王』」

「くっ！？」

『魔女狩りの王』は二メートルを超える炎の十字架を出現させ、上条につるはしを叩きつけるかのように振り下ろした。上条は、それを右手で受け止めた。今度は先ほどと違って、すぐに消し飛ぶことはない。どうやら、消えたそばから再生しているようだ。

「天野！早くしてくれ！」

「ここまでだよ。灰は灰に

塵は塵に

吸血殺しの

！？」

ステイルが上条に追撃しようとするが、突如スプリングラーが起動して、寮中の天井から水が降り注ぐ。

「……まさかこれで、『魔女狩りの王』の炎が弱まるとでも思ったのかね彼は？」

「思っていないぞ」

ステイルが現れた時と同じ様に、非常階段を上って天野が現れた。

「でも、コピー紙にルーンを書いたのは間違いだな。水でぬらせば

「インクが落ちちまうぞ」

「ッ!?!」

ステイルの今度こそ喉が干上がるのを感じた。先ほどの錯覚とは違う、現実を伴う確かな乾きだ。

「まっ、あとは任せたぜ俺の敵」

「おう。任せろ!」

上条が右手で十字架を握り締めた。すると『魔女狩りの王』は、今度こそ消し飛んだ。それを見て、ステイルは無様に『魔女狩りの王』の名前を呼ぶ。しかし、『魔女狩りの王』が再生することはない。そんなステイルに上条が走り込む。そしてその顔へと上条の右手が直撃した。ステイルは、まるで竹トンボのように回転して後頭部から手すりへと激突した。

『七月二十一日?』

「ダウンロードできたみたいですね」

「うーん?でも本当にこれで、レベルが上がるんでしょうか?」

白井と初春は、第177支部の駐屯場でパソコンに向かい合っていた。そのパソコンの画面では音楽ソフトが音楽プレイヤーへと転送されている。昨日、白井が調べた情報によると、この音楽ソフトこそが巷で噂になっている『幻想御手』だというのだ。

「情報提供者の話ではそうらしいですの」

「正直眉唾ものと言っか……」

「そこまで言うなら試してみたらいいですの」

「でも、副作用があるらしいじゃないですか……。はっ!もしこれでレベルが上がれば、白井さんに今までの仕返しを……!」

「思考がだだもれですの。そこまで仕返しがしたいなら是非」

そう言いながら、『幻想御手』がダウンロードされている音楽プレイヤーのイヤホンを、初春の耳に突っ込もうとしている。

「わ　　嘘です嘘ですよ　　」

初春はその手をなんとか止めながら謝る。白井はその手を止めて『幻想御手』の入手ルートの一覧を見る。ダウンロードサイト自体は、風紀委員の力で閉鎖できたのだが、すでに出回ったものを金銭で取引しているようなのだ。

「では、わたくしはこちらをまわってみますの」

「全部まわるんですか？かなりの数ですよ」

「そんなこと言ったらできません。コレが本当に実害を及ぼすものなら、地道でも活動するしかありませんの」

「そうですね。……まったくこんな時に天野先輩は何をしてるんでしょう？」

「あのゲス野郎は、きっと女のお尻でも追いかけているんですけど……！それより初春は、木山先生に連絡を先生の見解のほうをお願いしますの」

「あ。ハイ」

白井は資料を持って支部から出て行った。

「ああ。木山だ」

初春は白井が出て行ったあと、木山へと連絡を取っていた。

「現物なら届いているよ。……と言うか、少し前に天野くんが届けてくれてね」

「ダメだ！ほんとうにあの先輩、女の人を追いかけてた……！」

予想通りと言うか、ここまで来ると予想を外すほうが難しい気がする。てくる初春である。

「なんなら、今も私の研究室でお茶しているから、かわろうかい？」

「ッ！？……いえ、結構です。今、先輩に出られたら説教しなくてはいけませんので」

一瞬、怒鳴りそうになるが、一度気持ちを落ち着けてから、木山からの申し出を丁寧に断りしてから本題へと入る。

「で、どうなんでしょう？音楽ソフトでレベルが上がるものなんですか？」

「難しいね」

「レベルに影響を与える、と言うことは、脳に何らかの影響を与えるシステムが必要になる。本来の開発の授業でも分かるように、脳に影響を与えるようなことは、ゆっくり時間をかけて行わなくては

ならない」

木山は君も知っているだろう?と言った。

「はい。でも、他には脳に影響を与えるような物は、ないんですか?」

「ん?.....ああ、それがあつたね。助かるよ天野くん」

初春が質問するが、どうやら電話の向こうで、あの先輩が木山に話しかけているようだ。

「先輩が何か粗相をつ!?!」

慌てた様子で初春が尋ねる。

「いや。大丈夫だよ。彼は助言をしてくれただけだ」

「助言?」

「ああ。『テストメント学習装置』というものがあるんだがね。これなら短期的に脳に大量の情報を送り込めるよ」

「じゃ、じゃそれなら!?!」

「だがこれは、聴覚だけではできないんだ。『テストメント学習装置』は五感すべてに働きかけることで、作用するものなんだよ」

「そう、ですか.....」

木山の答えに初春は頂垂れる。せっかく状況を打破できるかと思っただけだが、そう簡単に行かないようだ。

「すまないね。何かわかったら連絡するよ」

「よろしくお願いします。あつ！先輩に遊んでないで、仕事してください！って伝えといてください」

「ふふつ。わかった。確かに伝えておくよ」

初春は、そこで電話を切る。続いて携帯電話の電話帳を開いて佐天涙子の名前を探し、電話をかける。

ガチャ

「あ、もしもし、佐て」おかけになった電話は電波の届かない所にあるか……………」

電話をかけるが繋がらなかった。

「やっぱり、繋がらないか……………」

初春は、昨日の佐天の事が気になって電話をかけたのだが、昨日からつながらないのだ。

「佐天さん……………」

「遊んでないで仕事してください。だ、そうだよ天野くん」

「春生さん。も一度言ってください。次は天野くんのところを先にして」

天野は真剣な表情で木山に頼む。

「ん？別にかまわないが。……天野くん遊んでないで仕事しなさい。これでいいかい」

「……………」

「…………天野くん大丈夫かい？」

天野はふるふる震えながら、黙っている。そんな天野を見て木山が心配するように声をかけた。

「だ、大丈夫です。ちょっと昇天しそうになっただけです」

「それは大丈夫とは、言えないんじゃないかな？」

木山は若干苦笑いしながらそう言った。

「そうですかね？普通のことですよ。春生さんみたいに綺麗な人に、

そんなこと言われたら、俺、俺……！っと、やばいやばい。昨日みたいにトリップするところだった」

「昨日？昨日何かあったのかい？」

「心配してくれてるんですね！？嬉しいです春生さん」

「……ふふっ。君は面白いな。私が心配したくらいで、それだけ喜んでもらえる、私としても嬉しいよ」

木山は照れたように笑う。天野はそんな手を取る。

「いえいえ。貴女のように美しい人に、心配されるだけで幸せですから。だから春生さん俺と結婚を前提に
pipipi
pipipi」

天野が台詞を言いきる前に、天野の携帯電話に電話がかかってきた。

「……でなくていいのかい？」

「くっ！！すみません。ちょっと待っててください」

そして天野は電話にでるために、木山の研究室から出る。

「おいおい。なんなんですかア！俺の敵が気安く俺のケータイに電話してんじゃねえぞ！ゴラ！！」

「……なんかキャラがかわってませんか？天野さん」

電話の主は天野の敵、上条当麻だった。

「あたりめエだろうがア！俺は一世一代の告白をするところだつうのー！」

『なんだ、よかった。どうせふられるんだろ。そんなこといいから、インデックスのやつが目を覚ましたんだ。天野も来てくれよ』

「なんで俺がガキのために、レディとの時間を潰さなきゃいけないんだよ……！？それと振られるとか言うなア！」

『だって、お前の告白が成功したの見たことないし』

上条のその一言で、天野はその場に崩れ落ちる。上条の一言が天野の心の深い所を抉ったのだ。

「……いんだよ。これからなんだよ」

天野は独り言のように同じ言葉を繰り返す。電話の向こうでため息が聞こえるが、今の天野にとってはどうでもいいことなのだ。

『いやー。実はインデックスの知り合いで、シスターさん（年上）が来てるんだけど……。やっぱ無理か？』

「行く！！いや、行かせてください！！」

一瞬で立ち上がった天野は、電話の向こう側にいる筈の上条に頭まで下げる。

『なんだ。来てくれるのかよかった』

「…………いや、ちょっと待って。今、俺は一世一代の告白を」

『シスターさん（年上）。お前にすごい会いたがってるぞ。インデックスを助けてくれたお礼がしたいって…………』

「やつぱ行く！」

『オツケー。じゃあ小萌先生の家で待ってるからなー』

そこで上条が電話を切る。天野は用事ができたことを、木山に伝えるために研究室のドアを開けようとする。だが、ドアは天野が開ける前に開けられ、木山が出てきた。

「春生さん。俺ちょっと用事ができたんで、行かなきゃいけないんですけど…………」

「なんだ。ちょうどよかった。私もこれから出かけるところだったんだ。…………どうせなら、送ってあげようか？」

「本当ですか！？ぜひお願いします」

「そうか。じゃあ車を移動させるから、出口で待っていてくれ」

「はい」

木山はそのまま駐車場へと向かっていく。天野は車が出てくる出口へと向かった。

『七月二十一日?』(前書き)

文の量は少ないですが投稿です

『七月二十一日?』

「……年上シスター年上シスター」

「ねえねえー。とうまー。なんで、あまのは部屋の隅でうずくまってるの?」

「気にしないでいいぞインデックス。いつもの症状だ」

「ふーん。そうなんだ」

天野と上条は、彼らの担任月詠小萌の住んでいる時代遅れのボロアパートにいる。昨日大ケガを負っていたインデックスだが、あのあと、子萌先生の援助もあって、ケガ自体は完治できたのだ。

「……って、言うか何でインデックスはそんなに元気になってるの?」

首を傾げながら、上条がインデックスに尋ねる。

「わかんない。あの魔術は傷を治すだけで、体力は回復しないんだよ。でも、あまのが来たら元気が出たんだよ」

「だってさ。天野なんかしたのか?」

「……………黙れ俺の敵」

部屋の隅でうずくまっていた天野は、一度顔をあげて上条を睨みつけて、再び顔を伏せる。

「悪かったよ。嘘ついて、でもそうしないとお前こないじゃん」

「……………ちつ。わかったよ」

天野は諦めたように頂垂れてから、部屋の隅からインデックスが寝ている布団の方へとやってくる。

「俺の能力『ベストコンディション心身健康』の力だよ。体力や精神力を常に最高の状態で維持できる能力で、周りの人間にも作用するからインデックスにも効果があつたんだろ」

「へえ。って言うか、そんな能力だったけ？前に聞いたときは違つた気がするけど？」

「どつちでもいんだよ。この野郎……………！」

「結局、あまのの能力ってどんな能力なの？」

「うるせえぞ。このガキが……………！」

天野は、八つ当たり気味にインデックスを睨む。

「ガキじゃないんだよ！私も、流石にこのパジャマはちょっと胸が苦しんだよ」

「なん……、馬鹿な！バグってるです、いくら何でもその発言は舐めすぎです！」

冷蔵庫の方へと飲み物を、取りに行っていた小萌が戻ってきて、怒鳴った。

「苦しくなる胸なんかあったんか!？」

「「……………」」

上条の発言に、少女二人の視線が上条に突き刺さる。上条はすぐに土下座モードへと移行する。

「っていつか、どっちもガキだろ」

「「……………」」

今度は天野へと視線が向かう。しかし、天野は気にせずいつも通りだ。

「……………天野。一応、先生も年上だぜ」

「い、一応ってなんですか上条ちゃん！」

「だってさー。どっちつかずじゃん。確かに、年上なのに年下っぽいのは、萌えるよ。確かに萌えるけどさ、ここまで来るとねえ」

天野は怒っている小萌を、残念そうに見つめる。それを受けて、小萌はさらに怒る。

「と、年上です！ちゃんと大学も出てるんです！」

小萌はぴよんぴよん飛び跳ねながら怒っている。天野は子どもをあやすように、頭を撫でる。

「はいはい。そうですね先生。………それより、レディとの時間をつぶさせてまで俺を呼んだ理由は？」

「無視するんじゃないですー！ちゃんと大人だって認めるんですよー！」

「わかりましたわかりました。先生は大人ですよ。ほら、大人な先生にあめ玉あげますから、静かにしててくださいね」

「わーい ありがとうございます………って、子供扱いしないでくださいー！」

小萌はその小さな体全身を使ってノリツッコミをする。しかし、天野は俺の仕事は済んだ、とばかりに小萌を無視して上条へと向き直る。

「理由は結局なんなんだよ？」

「いや、インデックスが「あまのは？」って、聞いたから。呼んでやろうかなって」

「おもて出るコラッ！ー！」

天野は立ち上がり怒鳴り散らす。上条と小萌はいつものことなので、完全にスルするが、インデックスが布団をかぶってオロオロして

いる。

「気にするなインデックス。天野はお前のこと怒ってる訳じゃないから」

「……………そうなの？」

インデックスは、恐る恐ると言った様子で布団の中から顔を出す。

「でも、あまのすごい顔だよ？」

「生まれつきだ」

「ぶち殺すぞ teme エー!!」

その怒鳴り声で、インデックスは再び布団の中へと潜り込んでしまふ。

「まったく、天野が怒鳴るから、インデックスが怖がってるだろ」

「お前の所為だろうが……………!!」

人ごとのように言う、上条を天野が睨む。

「ほら。インデックス。せっかく元気になったんだから、銭湯にも行くこうぜ。さっきまでかなり汗かいてたし。さっぱりしたいだろ？」

「ジャパニーズ・センターなら知ってるんだよ。行ってみたいかも」

「じゃあ行くこうぜ。天野も行くだろ？」

上条は天野の睨みを一切無視して話を進める。そのうえ、睨んでる天野まで誘い始めた。

「なんで俺が行く話になつてんだ？」

「だって暇だろ？」

当たり前のことを言うように上条が言った。その台詞に天野はギリギリと歯ぎしりをする。

「誰の所為で、暇になったと思ってるんだ……！」

「まつ、気にすんなよ。じゃ、俺とインデックスは先に行ってるから、あとから追いかけるよ」

「おい。それこそなんでだよ……！？」

怒鳴りたいのを精一杯我慢して天野が尋ねる。

「いや、だって銭湯に行く道具ないだろ？俺はインデックスが起きる前に、日常的なものは持ってきてあるし、インデックスは小萌先生が貸してくれるって、言ってたし」

「なら、俺は行かなくてもいいじゃん！」

「？」

「おいおい！本当に「なんで？」って顔すんじゃないよ！」

「だって、銭湯なら年上いるかもよ？」

「ごめん。俺が悪かった」

物凄い速度で天野は土下座モードへと移行する。そしてすぐに行動へと移る。

「じゃ、俺道具取ってくるわ！着いたら先に入っていていいぞ！アデイオス」

天野は上条たちに別れを言って、すぐさま寮へと向かっていった。

「まったく、あいつは単純だな」

「まったくですー。天野ちゃんは素直と言うより、単純ですー」

「あまのは、よくわからないんだよ」

『七月二十一日?』(後書き)

次回はついに神裂さんの登場です!

『七月二十一日?』

「だったら、テメエは、こんな所で何やってんだよ!」

上条は叫んだ。その体は傷だらけで、今にも倒れそうなほどだ。それでも、上条は叫ぶ。

「それだけの力があって、これだけ万能の力を持っているのに……何でそんなに無能なんだよ………」

しかし叫びは届かない。そこで上条の意識は暗転する。体は力を失い、その場へ崩れ落ちる。

「……………彼女は貴方に預けておきます」

『魔術師』神裂火織はそれだけ言うと、上条を置いてその場をあとにしようとする。そこへ突然声が響いた。

「待ってよー。素敵なお姉さん」

「ッー!？」

そこには、ひとりの少年が立っていた。

神裂はすぐさま臨戦態勢へと移行する。「聖人」である彼女の鋭敏な感覚は人の気配を逃さない。……はずなのに、ここまで接近するということは、かなりの実力者ということになる。そのうえ、この場にはステイルの『人払い』がある。

「……どやって『人払い』を？」

少年の出方を伺うために、神裂は疑問を投げかける。

「『人払い』？なにそれ？よくわからないけど、歩いていたら急に人がいなくなっちゃってさー。でも、貴女みたいに美しい女性に出会えるなんて、これは運命ですかっ！神様！？」

少年がいきなり叫んだ。少年の奇行に神裂は驚くが、そこでステイルの言っていた、もう一人の少年のことを思い出す。

「……貴方はステイルの言っていた、もう一人の天野という少年の方ですか」

「しかも俺のことを知っている！？これは運命！いや、宿命か！まさか前世からの恋人！？千年の時を経て運命の再会！ここから始まるふたりの『恋愛浪漫』」

「七閃」

神裂は、いきなり訳の分からないことを言い出した天野を止めるために、天野の周りのアスファルトを削り取る。

「な、なんでこんなことを!?……はっ!まさか千年ぶりの再会が恥ずかしくて!?こ、これは千年越しのツンデレ!?な、なんてハイレベルなっ!」

「七閃」

今度は天野の体の近く、ぎりぎりを神裂の攻撃が通過する。

「あぶなっ!?あ、危ないじゃないか!?マイハニー!？」

「次は当てます」

それでも止まらない天野に神裂は警告する。

「ふっ。今こそ使わせてもらっぜ。青髪ピアス!手段を選ばぬほどの膨大な愛、受け止められずしてハーレムルート切り開けるものかーっ!!!」

「七閃」

今度の攻撃で、神裂は天野の髪を一房切り落とした。

「うおおおっ!!あつぶねえ〜!!……じよ、冗談だぜ」

「冗談は好きません」

「さ、さいですか」

天野は怯えたように頷いた。神裂は一度、頭を振って気持ちを落ち

着ける。

「……しかたありませんね。彼を利用することで『インデックス禁書目録』の動きを封じるつもりでしたが、貴方がいる以上、『インデックス禁書目録』は、今回収することになります」

そして神裂は、そう宣言した。

「おいおい。そんな『道具』みたいに言うなよ。友達だろ」

天野の言葉で神裂の動きが止まる。

「……盗み聞きとは趣味がよくありませんね。いったいいつから……?」

「んん? そりゃあ、火織が名乗る前からですけど……?」

天野はさも当然のことを言っているように答えた。と、なると天野は、『人払い』をはる前から、ここにいたことになる。

「最初から、ということですか……。ならばなぜ、彼を助けなかったのですか?」

神裂は敵かもしれない、天野についていっしょに尋ねてしまった。

「うーん。アマノは因果の本流には、関与できないんだよね。って、アマノはアマノは伏線をぶっ込んでみたりー」

「冗談は好かない。と、言ったはずですが」

神裂のドスの利いた声に、天野は苦笑いして答えた。

「あははっ……。いやー。ほんとの所、火織があまりにも綺麗な
で見蕩れちゃってたんだよねー」

「……どうやら貴方は、真面目にやるつもりがないようですね」

天野の適當さに、神裂はため息をつく。それに天野は驚きの声をあ
げた。

「そつ、そんな！？俺の真剣な想いが伝わらないなんてっ！？」

「ッ！……ふざけているのですか」

一瞬、怒鳴りそうになるが、神裂は息を整えてからそう言った。

「ゴメンゴメン。気を悪くさせちゃったかな？」

神裂は一度、話を元に戻すために深呼吸をしてから話し始めた。

「……戯言はそこまです。話を聞いていたならわかるでしょう『
禁書目録』を救うには、彼女の記憶を消すほかありません。そして、
それができるのは『魔術師』である私たちだけです。だから、彼女
を渡してください」

神裂は、頼むように願うように祈るようにそう言った。

「い・や・だ」

即答だった。

天野の答えは、頼みを無下にし、願いを踏み躪り、祈りを叩き潰すような物だった。

「ッ！！！」

神裂はその答えに、怒りが一瞬で沸点に到達する。沸点に到達した頭は、真っ白になりその手が勝手に動く。

「しまッ！？」

気付いたときには、既に遅かった。その手からは、必殺の抜刀術である『唯閃』が放たれていた。もう止めることはできない。放たれた『唯閃』はブレることなく、天野へと向かう。

斬！

と、天野のいた場所ごとすべてを切り裂いた。

……

……

……

……

……

切り裂いたはずだった。しかし、惨憺たる光景が広がっていたはず

の、場所に天野が平然と立っていた。そして、当たり前のことがあったかのように話します。

「聞こえなかった？い・や・だ。って言ったんだぜ」

「……………」

神裂は声をあげれない。天野が生きている疑問よりも、天野が生きていることへの安堵感で声が出ないのだ。ふたりの間に静寂が訪れる。どうやら天野は、神裂が話すのを待っているようだ。

「……………なぜ、ですか」

弱弱しく神裂が尋ねる。

「なぜって。そんな『記憶を消す』なんて方法じゃ、救えないからだよ」

「しかし…………！彼女を救うには、それしか　　ッ！！」

「そつちじゃない」

神裂の叫びを、天野は遮った。

「『インデックス 悲劇のヒロイン』なら、どうかの『ヒーロー』が救ってやれる。例えば、そこで伸びてる俺の敵とかな」

天野は近くで倒れている上条を指差した。

「でも、俺が救いたいのはそつちじゃない。俺が救いたいのは『救かんきありかり』」

われぬ者』だ」

「なに、を、いって、いる、の、ですか……………」

天野の台詞に神裂は、先ほどとは、別の意味で頭が真っ白になる。

「俺の敵が『偽善使い』^{フォックスワード}に、なれって言ってたように、何度でも何度でもやり直すべきだった……………。でも、恐ろしかったんだろ。恐くて、怖くて、残酷で、凄惨で、醜悪で、愚劣で、そして何より救えなかった。だから、手を差し伸べるのを諦めた。だけど、諦めた人間がもう一度、手を差し伸べちゃいけない『理由』^{ルール}なんて無い」

それを聞いた神裂の瞳に、一瞬、希望の色が映るが、すぐに絶望の色が戻る。

「だからこそインデックスは渡せない。今ここでインデックスを渡したら『救われぬ者』^{かんざきあり}を救えない。たとえ記憶を消して、都合よくやり直してもダメなんだよ。やり直すっていうのは、過去を消し去ることじゃない。過去を背負うってことだ」

そこまで言われて、やっと神裂は言い返す。

「……………まるで、彼女を救えるような物言いですね」

天野はそれに特に考えず答える。

「救える。……………まあ、『インデックス』^{ヒロイン}を救うのは、『俺の敵』^{ヒーロー}の役目だけだな」

「……………わかりました。三日待ちます。それがアナタ方に残された時

間であるとともに、彼女に残された時間でもありません。それをお忘れなく」

神裂は一度、頷いてから言った。

「オツケー！オツケー！素敵レディの期待に応えるのが俺の役目ですから！」

天野は嬉しそうに答えた。神裂はそれを見てから、物凄いスピードでどこかへ行ってしまった。

「はえー！」

神裂が消えた方を天野が見ていると、『人払い』がとけたのか騒がしくなってきた。

「ちゅーか。コレどうすの？」

天野は、近くで倒れている上条を見て頭を抱える。

「やっぱりコレ俺が運ばなきゃダメかな？」

「あまの！とうま！」

上条を天野が背負っていると、二人を呼ぶ声が聞こえた。そちらを見ると、インデックスが走ってきている。どうやら騒ぎを聞きつけてここへ来たようだ。

「やつほー。インデックス。コレ代わりに背負ってくれない？」

インデックスに背中の上条を見せる。

「とうまっ!？」

「うわっ!いきなり飛び付いたら、あぶねえだろっが!」

「で、でも、とうまが!」

インデックスは上条の怪我で、気が動転しているようだ。天野は、ため息をついてから事情を説明する。一応、『魔術師』達がインデックスと同じ組織にいることは、黙っておいた。

「……私の所為だ。私の イタツ!？」

天野が俯いているインデックスの頭へと、チョップを入れる。

「お前の所為じゃないさ。俺の敵が勝手に決めて、勝手に動いただけだ。気にすんな。それに、コイツはこれぐらいじゃ死なないって」

「で、でも……」

「おいおい。まだ俺にガキに気を使わせる気か?あんまりやると最初みたいに、天罰食らう恐れがあるんだけど……」

天野は佐天のことを、思い出したのか、ブルッと身ぶるいをする。

「……うっ……」

納得できないのか、インデックスが唸っている。天野としては、これ以上ここにいと、この騒ぎの原因にされかねないので 間違

いなく原因なのだが、インデックスを促す。

「ほら、さっさと行くぞ。悩むより先に、手当てが先だろ？」

「そつ、そうなんだよ！早く手当てするんだよ！！」

「わかったら行くぞ」

天野が上条を背負って、インデックスがその後を追う、というかたちで歩き出す。

「いつ、急ぐんだよ！あまのー！」

「だあー！もう！わかったよ！ほら掴まれ！」

「わ、わかったんだよ！」

天野はインデックスをコアラ抱っこする。

「ど、どうするんだよ！？」

「こつすんだよ」

天野は、神裂が去って行ったときのような、物凄いスピードで移動しだした。

「あ、あまのつて、す、すごいかも！？」

「うるせえ！舌嚙むぞ！俺は野郎もガキも抱く趣味はねえんだよおおおおお！一刻も早く帰って体を洗浄したい気分だこの野郎！」

天野は叫びながらも子萌の家に向かって、猛スピードでビルとビルの間を移動する。

『七月二十四日?』

「はい。ちょっと沁みますけど動いちゃだめですよー」

「痛ッ」

「日に日に生傷が増えていきますね」

「仕方ありませんわ」

『幻想御手』が発見されてから三日。風紀委員の中でも肉体労働が基本な白井は、この三日間はひたすら『幻想御手』を使用して、悪事を働く能力者を相手にしてきたのだ。そのために体のあちこちに生傷ができている。

「それに、泣き言を言っても始まりませんわよ。わたくしたちに、課せられた使命は『幻想御手』の拡大防止、昏睡状態にある能力者の回復、そして……、『幻想御手』の開発者の確保」

「……そうですね。私たちがシツカリしないといけませんよね」
初春は駐屯所で怪我だらけの白井を、手当てしながら頷いた。軽い怪我は、一通り手当てが終わったので、白井に上の服を脱いでもらい再び手当てを始めた。

「その意気ですの。……だというのに、あのゲス野郎は、どこで油を売っているんですの……!!」

白井は今にも叫びだしそうなほど、手をかたく握りしめる。

「なんだあ、俺にようかあ？」

「どこでなに　　ッ!？」

それに呼応したかのように、天野が資料室の方から出てきた。白井は天野に怒鳴ろうとするが、現在、自分が上半身裸なのを思い出して、すぐさま近くにあった椅子を、天野の頭上にテレポートさせる。

「まったく。あぶねえだろ」

天野はそれを読んでいたかのように、落ちてくる椅子を手でキャッチした。

「安心しろ。俺はお前みたいなガキに興味ないから」

「　　キイイイ!!」

白井が今度は別の理由で近くにあったものを、手当たりしだいテレポートさせようとするが、天野は給湯室の方へと行ってしまった。しかたなく、白井はその間に服を着る。

「ふああ」

ちょうど服を着終わった辺りで、天野が大きな欠伸をしながら戻ってきた。その手には、眠気対策のためブラックコーヒーが入れられたカップを手に入れている。

「……………それで、ゲス先輩は、いったいどこで何をしたらしたんですの?」

色々と言いたいことがある白井だが、とりあえず天野のここ三日間の動向を伺う。

「スピー……………」

天野はカップを手に持って立ったまま寝ている。

「……………初春。このゲスの体内に直接テレポートさせても構いませんの?」

「……………風紀委員で殺人犯を出すわけにはいかないので我慢してください」

ふたりはため息をつきながら天野を眺める。どうやって叩き起こそうかと思案している。

「おっすー。何か私に手伝えることないー?」

御坂が入ってきた。どうやら能力を使ってセキュリティを解除したようだ。本来なら注意をしなくてはいけない、白井と初春だが今は、これ幸いとお互いにアイコンタクトを交わす。

「「あります(の)」「」

「?……………。ああ、そういうことね」

即答されて疑問を浮かべた御坂だが、立って寝ている天野を見て、

にやりと笑った。そして

「スピー、スピー……あばばばっばっ！……！」

御坂は立っている天野の手を取り直接電撃を流す。

「はっ！……悪い悪い。ちょっと寝ちゃってたわ」

電撃を直接流されたにもかかわらず、いつもの寝起きのよう天野が起きた。

「ねえ。私、割と本気で流したんだけど……！」

平然としている天野を見て、御坂が落ち込んだ声をあげる。

「気にしては負けですわ。お姉様」

「そうですよ。御坂さん。先輩を人間扱いしちゃだめです」

そんな御坂をふたりが慰める。実は御坂はこの三日間、とある『お馬鹿さん』の所為で落ち込んでいたのだ。その状態からようやく復活したにもかかわらず、また落ち込みそうになってしまった。その御坂はとりあえず気を取り直し天野へと質問する。

「……それで、あなたは三日間なにやってたのよ？」

「あゝ。そんな話してたな。え〜っと、なにやってたっけ……」

天野が考え込むように頭を抱えた。

「思い出せないようでしたら、頭の中に直接テレポートして差し上げますの」

白井は普段スカートの下に隠してある金属矢を取り出す。

「あはははっ……。そうそう。思い出した思い出した。この三日間ずっと宝探ししてたんだよね」

苦笑いしながら天野が答えた。次の瞬間、天野へと椅子と電撃が襲来した。

「あばばばばっ

ガヴァッ!!!」

「次はないわよ」

「次はありませんの」

最後通牒とばかりに、御坂はその手には紫電がほとばしらせ、白井は一番大きな机に手を触れている。

「私もいますよ」

そう言った初春の手には、携帯用の音楽プレイヤーが握られている。

「お、おい。それ、まさか……。『幻想御手』じゃ、ない、よな……。いや、ないですよね」

初春は黙ったまま、じりじりと天野との距離を詰める。

「私だって、こんなことしなくないんですよ。……でも、しょうがないじゃないですか。先輩が、先輩がちゃんとやってさえいれば……」

「いつ、いや！まつ、待て！ちゃんと調べてきたから！なっ！落ち着けて……！？」

迫ってくる初春との距離を、保ちながら天野が説得を試みる。

「……………そうですね。チャンスは必要ですよ。どうぞ、先輩。懺悔の時間ですよ」

「チャンス終わってるじゃん！？」

逃げ出そうとした天野を、背後にレポートした白井が拘束する。その間も初春は確実に距離を詰めている。御坂は逃げられる場合を想定して、出口を守るための布陣を取っている。すでに天野の逃げ場はどこにもない。

「さあさあ。ゲス先輩。お別れの時間ですよ」

「たっ、頼む！懺悔でいいから、せめて喋らせて……！」

「……………どうぞ」

初春の目はすでに諦めかけているが、それでも最後のチャンスを与えることにしたのか、その手を止めて天野を促す。

「共感性って知ってるか」

「残念ですがお別れの様子ですね」

最後の別れを告げて、初春が音楽プレイヤーのイヤホンを天野の耳元へと近づける。

「ちょっと待って!？」

「ちょっと待つんですの!？」

その手を御坂と白井の叫びが止める。

「あんた!共感性って言ったわよね!」

御坂が布陣を解除して天野へと近づく。白井も話を聞くために、拘束を解いて天野が話し易いようにする。

「ああっ!よかった!!やっぱり「つるぺた」なら、知っているか……」

ひとまず身の危機が去ったため、天野は安堵のため息をつく。

「普段なら怒鳴ってるところだけど、今はそれどころじゃないわ。言ったの言っていないの!」

「言ったよ。それでな、共感性を利用すれば、音楽だけでも『学習装置』と同じ効力をあげられるはずだ」

「つまり、曲自体が五感に働きかける作用があるってことね」

「……確かに可能ですわね」

「？」

初春だけがクエスチョンマークを浮かべている。しかし、御坂や白井は納得した表情を浮かべる。ここでやっと『幻想御手』についての事態が好転した。

「黒子っ

！！！！佐天さんが倒れたって……………」

しかし事態は急変した。なぜなら初春の親友である佐天涙子が倒れたのだ。

「やっぱり『幻想御手』がらみ……………」

「ええ。どうやらその線ようですの」

御坂と白井は、佐天が運ばれた病院に来ていた。

「初春さんは？」

「木山先生の所へ」

「じゃあ、あいつは？」

医者は天野を諫めると、御坂と白井はとある部屋へと案内する。その部屋は薄暗く、起動中のパソコンが一台置いてある。医者はそのパソコンの前に座ると、パソコンを操作し始めた。

「色々説明することはあるんだかね？とりあえずこちらの説明を先にするんだね？」

と、医者は前置きしてから話し始めた。

「僕は職業柄いろいろと新しいセキュリティを構築していてね？その中に一つに脳波をキーにするロックがあるんだね？」

そこで医者はパソコンの画面を御坂と白井、それと天野に見せる。

「これは、そのの彼が見つけたものなのだがね？」

それを受けて、天野は再び胸を張るがやはりこれもふたりは無視した。

「そして、それに登録されているある人物の脳波が植物患者と同じものなんだね？」

そこで医者がマウスをクリックした。すると画面にとある人物が映し出された。

「登録者名。 木山……春生！」

『七月二十四日?』（後書き）

質問というかアンケートですが、
そろそろ超電磁砲『幻想御手』編と禁書目録一卷の内容が終了しま
す。

次に書く内容としては、禁書目録のほうが中心になると思いますが、
なんと、二巻と三巻で年上が出てきません……orz

日ごろ出番のない巫女さんの出番もあるので書きたいのですが、
年上じゃないので攻略できない!?!と、気付いたのがつい最近でし
た……。

一応、公式で誕生日が発表されてなかった(はず)なので、
ぎりぎり年上設定ということで、二巻についてはゴリ押しで書くこ
ともできます。

三巻は少し書きたいところがあるので、そこだけはちょっと書きま
す。

そこで、アンケートを取りたいと思います。
内容は、二巻の内容を書くかどうかです。

書かない場合は、二巻を飛ばして三巻の一部だけ書いたら
すぐに四巻に入るよう予定です。

ご意見がある人は、作者マイページの活動報告のコメントか
感想にてお書きください。予定では一週間くらいの間を予定してい
ます。

ご意見お待ちしています。

頑張っ更新していくので応援よろしくお願いします

『七月二十四日?』

「もう話し終わったんすか?」

「そうみたいだね?」

天野は部屋へと入ってきた医者に眠そうに尋ねた。その部屋は所謂、集中治療室のようなつくりで、大きなガラスを挟んで二つの部屋が一つの部屋になっている。

「彼女たちは動き出したようだけど、君は動かないのかい?」

医者は不思議そうに尋ねた。

「うーん?動くけど準備を整えないとね」

そう言つて天野は、マジックミラーのようになっているガラスを覗き込む。

「その事なら大丈夫だね?今朝方すべてそろつたようだからね?」

続いて医者もガラスを覗き込んだ。

「ってことは、これで宝探しは終了ってことかな?やっぱり応援を

頼んで正解だったみたいだな。先生の方も大丈夫ですかー？」

「当たり前だね、誰に物を言ってるんだい？」

天野の問いに医者は毅然として答えた。それを受けて、天野は満面の笑みを浮かべる。

「そうでしたね」

「あとは君が『キー』になることで完了だよ？……それにしても珍しいね、君がこんなことをするなんて変なものでも食べたのかい？」

「あはははっ。先生が患者のために、なんでも用意するように、俺も大切な女性むすめのためなら何でもできるんですよ」

嬉しそうに笑ってから天野は医者にそう答えた。

「そうだったね？」

「じゃあ、そろそろ俺も行動開始と行きますかね。それじゃあよろしく願いますね。今日はやる事が多いので大変なんですよ」

「わかっているんだね？」

天野はそれを聞いて満足そうに頷いてからその部屋を出て行った。

「おい。鉄装大丈夫か。応答するじゃん」

「だっ、大丈夫です。せつ、先輩」

警備員である、黄泉川と鉄装は無線で連絡を取る。『幻想御手』の開発者である木山を捕えるために、先回りして道路を封鎖、続いて後方から回り込む形をとっていた。本来ならば、そこで身柄を確保して終わりになるはずだったが、予想外の事態が起きたのだ。

「それより、そっちの状況はどうなってるじゃん」

「はっ、はい。こちらの部隊はほぼ全滅です。動ける人間は数名しかいません。先輩の方は……？」

「こっちも同じようなもんじゃん」

お互いに落胆の声が漏れる。

「対能力者用の装備って……持ってきてませんよね……？」

後ろから聞こえた声に、驚いた黄泉川は無線を落としてしまった。落とした無線からは、鉄装の慌てている声がもれている。黄泉川が振り返った先には、いつものように笑っている天野が立っていた。

「ほら。血が出てますよ。ちょっと待っててください。今、

」

「何でこんな所にいるじゃん！！すぐに イツ！！！」

黄泉川は血を拭こうとした天野の手を振り払って叫んだ。その声が傷に響いたのか黄泉川は頭を押さえる。

「ああっ、もう！怪我してるんだから暴れないでください！」

天野は慌てて黄泉川のもとへと駆け寄る。

「……………どうして、こんな所にいるじゃん」

「ふっふっふ。変なこと訊かないでくださいよ。愛穂さんのピンチに駆けつけるのが俺の役目ですよ」

いつもと変わらない調子で答えた天野に、黄泉川は怒鳴った。

「『スキルアウト武装無能力集団』相手のケンカじゃないんだ！ふざけてる場合じゃないじゃん！！！」

「ふざけてません。俺は何時だって愛穂さんのこと真剣に考えてますよ」

天野は気にせずさりりと答える。そのせいで黄泉川は一瞬たじろぐがすぐに言葉を紡ぐ。

「……それでもじゃん！それでも子供を守るのが私たち大人の仕事じゃん！だからすぐに　　ッ!？」

その言葉を遮るように天野は黄泉川の肩を掴んだ。

「……それが愛穂さんの仕事なら、大切な女性ひとを守るのが俺の仕事です。だから、俺に愛穂さんを守らせてください」

天野は恥ずかしげもなくそう言った。その瞬間、黄泉川の顔がボンッと赤く染まる、天野はその黄泉川を抱きしめた。

「じっ、こんな、とつときに、なっ、ななななにいつてる、じゃ、じゃん!？」

「ふふふっ。照れてる愛穂さんすっげ〜可愛いですね。こんな可愛い女性ひとのためなら、俺は何度死んでもかまいませんよ」

顔を真っ赤にしてしどろもどろに喋る黄泉川を、天野は嬉々として抱きしめる。

「本当に、死ぬかも知れないじゃん……………」

黄泉川の顔はまだ赤いままだがなんとか声を絞りだす。

「大丈夫です。愛穂さんを悲しませるようなことは、しませんから」

「べっ、べっ悲しんだり、しっ、しないじゃん」

ようやく元の色を取り戻し始めていた、黄泉川の顔が再び紅潮する。

「……………そうですか。……………残念です……………」

天野はあからさまに残念そうな声をあげる。

「いつ、いやっ、あの、その……………」

明らかに動揺した声をあげる黄泉川に天野は笑った。

「ふふふっ。冗談ですよ愛穂さん。でも安心してください。俺は楽には「死ねません」から」

天野は抱きしめた黄泉川を離して、目を合わせてそう言った。しかし、黄泉川は不安な顔をしている。

「……………」

「だからそんな心配そうな顔しないでください。……………あっ！そうだ！無事に帰ってきたらデートしてくださいよ！」

「なっ、なに言って」

「じゃ、約束ですよー」

黄泉川の答えも聞かず一方的に約束を取り付けた天野は、木山がいる方へと走り去ってしまった。

『七月二十四日?』

「初春さんっ! しっかりして!!」

御坂は車の中で意識を失っている初春に声をかける。そんな御坂に木山の声が聞こえた。

「安心していい。戦闘の余波を受けて、気絶しているだけだ。命に別状はない」

声のする方へと御坂が振り返ると、瓦礫の山とかした警備ロボの中心に、木山が立っている。

「御坂美琴……。学園都市に七人しかいない超能力者か」

木山は最後の警備ロボに手から出現させた火球で爆散させる。そしてそれを気にせず御坂の方へと振り返った。

「私のネットワークに超能力者は含まれてはいないが……。さすがの君も私のような相手と戦った事はあるまい」

振り返った木山の顔は、いつもの気だるそうな顔ではなく、どこか

力に満ちた顔をしている。

「君に一万の脳を統べる私を止められるかな？」

木山はそのまま手を横に薙ぐ。すると、そのラインをなぞるように路面が一直線上に爆発する。御坂は能力で電磁場を作りだし、爆発を回避する。

「驚いたわ。本当に能力を使えるのね。しかも……………」
『多重能力者』デュアルスキル「！！！」

「その呼称は適切では「全然違うぜ」

木山が御坂の発言を否定するより早く、別の声はその発言を否定した。木山と御坂は声のした方へと視線を向ける。

「全然違うぜ」「つるぺた」。全然違う。『多重能力者』デュアルスキルはひとりの能力者に複数の能力が発現することだ。でも、これは発現した複数の能力を、ひとりが使用しているだけだ。しいて名前をつけるなら……………
『多才能力者』マルチスキルってとこかな

「…………彼の言うとおりだよ。私の能力は理論上不可能とされるアレとは方式が違う」

突然現れた天野の意見に木山も同意する。

「…………呼び方はともかく。私がやる事にかわりはないわ。……………
って言うか、なんでアンタがそんなこと知ってんのよ？」

「ん？秘密だ秘密。謎が多い方がミステリアスでカッコイイだろ？」

御坂の質問に天野は、考えもせず即答した。

「あんたまさか、そんな理由で能力を秘密にしてるわけないわよね
……………」

「えっ！？そうだけど…………？」

今度もやはり即答だった。呆れた御坂がため息を漏らす。

「…………もういいわ。それより何であんたがここにいるのよ？」

「そりゃあ、助けにきたに決まってるんだろ」

天野の答えに御坂は再びため息を漏らした。

「…………あなたの助けなんていらないわよ。知ってるでしょ。私は超能力者の御坂美琴よ」

「いや。俺が助けにきたのは春生さんの方だし」

「えっ！？」

「えっ！？」

「……………」

「……………」

天野と御坂。ふたりの間に重たい沈黙が下りる。

「……君は私を助けにきたのかい？」

その沈黙を打ち破ってくれた木山を、まるで救世主であるかのよう
に天野と御坂が視線を向ける。

「そつ、そのとおりです！春生さん！！」

天野は慌てた様子で言葉を発する。

「ちよつ、ちよつと！？あんた何言ってるのよ！？」

その天野の発言に、今度は御坂が慌てて怒鳴った。

「おいおい。よく考えるよ御坂。お前みたいな「つるぺた」なガキ
を助けるなら、春生さんみたいな、綺麗で素敵でナイスバディーな
年上レディを助け　　バンツ！！」

朗々と語っていた天野の足元に銃弾が突き刺さった。天野は恐る恐
る振り返った。そこには拡声器を持った黄泉川が、凍った笑顔を顔
に張り付けたまま立っていた。

「……えつ、えつと。あつ、愛穂さん……？」

「あつ。あつ。テストテスト。おい。そのこの少年。それ以上余
計なこと言ったら、流れ弾が頭に当たるかも知れないじゃん」

拡声器の調子を確認してから黄泉川がそう言った。

「こつ、これ。制圧用のゴム弾じゃなくて、実弾ですよ、ね……」

…？しつ、しかも、頭限定って……。間違いなくわざとじゃ
バンッー！」

顔を引き攣らせている天野の足元へと再び銃弾が突き刺さる。

「……………」

黄泉川は笑ったまま、なにも言葉を発しない。それが逆に天野に恐怖を募らせる。

「……………あんだ。あの人になにしたのよ……………」

「なにつて……。いつもどおりのはずだけど……………」

恐る恐る尋ねた御坂に天野が首をかしげる。その反応に、黄泉川の顔がさらに凍りつく。

「……………そろそろいいかい？私には目的があるのだがね」

逸れはじめた話題を、元に戻すように木山が声をあげる。その声にこれ幸いと天野が飛び付いた。

「そつ、そつですよ。春生さんを助けにきたんです！」

「あんだ。まだ言ってるの？わかってる？こいつが『幻想御手』の開発者なのよ……………！」

そんな天野に御坂が怒鳴った。そんな御坂の言葉を認めるように木山が続く。

「彼女の言つとおりだよ。私が『幻想御手』の開発者だ。つまり君たち風紀委員の敵ということだよ」

「わかってますよ春生さん。だから止めに来たんですよ。こんな方法で救つても、あの子供たちが笑顔になれないですから」

「……………知っていたのかい？」

天野の発言に木山はかすれた声で何とか言葉を返す。

「ええ。だから止まってください」

「……………なんと言われても、私は止まらない！この街の全てを敵に回しても私は止まる訳にはいかないんだっ！！」

制止を促す天野に木山は叫んだ。そしてその叫びと共に手を振るう、すると今度は手から大量の水を弾丸のように打ち出した。

「あんたがなに言ってるかわかんないけど、とりあえずはあいつを止めるのが先よっ！！」

「レディに手をあげるのは、俺の流儀に反するんだけどなっ！」

天野と御坂は木山の攻撃を回避する。御坂は回避しながら、電撃の槍を木山へと放った。しかし木山にぶつかる瞬間、電撃が地面へと逸れて行く。

「どうした。複数の能力を同時に使う事はできないと、踏んでいたのかね？」

「ばかぁー！！春生さんに攻撃してんじやねえよ！！」

「あんたはどつちの味方よ！！」

怒鳴る天野に御坂が吠える。そんなことを気にせず、木山は足をコツンと踏みならした。すると、足元に輪が出現したかと思うと地面が陥没していく。

「いつ！？」

「きゃあっ！？」

「愛穂さん！！」

地面の陥没に天野、黄泉川、御坂の三人が巻き込まれる。落ちそうになる黄泉川を抱えて、天野が陥没から逃れる。御坂は能力を使って、近くの柱へと張り付く。陥没の中心にいた木山は、何らかの能力を使ったのか着地の瞬間に落下の速度が落ちて地面にゆっくりと降り立った。

「大丈夫ですか？愛穂さん」

「……………」

天野は黄泉川を抱えたまま尋ねるが、黄泉川は黙ったまま目線を合わせようとしない。

「……………もしかして嫉妬してます？」

「守るって言ったじゃん」

拗ねたように黄泉川が言った。そんな黄泉川に天野は動揺する。

「いつ、いや、あの、さっきのは……。えっと、あっと……。その、
すいません……………」

「……………何で謝るじゃん」

「うっ」

天野は完全に言葉が止まる。天野と黄泉川の間には沈黙が訪れる。

「あゝあゝ冗談じゃん。助けるって言ったんだから、さっさと助け
に行つてやるじゃん」

「でっ、でも……………」

「言った事はちゃんと守るじゃん。……………もちろんは私の事も守つ
てくれるじゃん？」

「はい！もちろんです！」

嬉しそうに天野が返事を返す。天野が抱えていた黄泉川を下ろそう
としたとき

ギイイイイイイアアアア！……………！！！！！！

獣の咆哮のようであり、赤ん坊の泣き声のような叫び声が
響き渡る。

「なっ、なんじゃん!？」

「ちっ、「つるぺた」のやつ何してんだよ。愛穂さん、ここはよろしくお願いします。俺は約束を守ってきますから」

天野は話しながら黄泉川を下ろす。

「木山はお前に任せるじゃん」

「はい!」

黄泉川の声援を受けて、天野は叫び声がした方へと走りだす。

『七月二十四日?』

「~~~~~ツ!何なのよアレ」

御坂がうめき声をもらす。その御坂の目の前には胎児のようなものが浮いている。この胎児は木山を倒した途端出現したのだ。御坂が対応に困っていると、その胎児が獣の咆哮のようできて、赤ん坊の泣き声のような叫び声を響き渡らせる。

ギイイイイイアアアア!!!!!!!

それに呼応するように、胎児の周りが爆発する。どうやらあの胎児は、木山が使っていた能力を使えるようだ。

「はッ!!!」

御坂は胎児に電撃の槍を放つ。電撃の槍は胎児に当たる、すると胎児の体が爆ぜた。

「いい!!あつさり……? ツ!!!」

しかし爆ぜたと思った部分はすぐに元に戻った。そして胎児は反撃とばかりに、近くの瓦礫を御坂へと飛ばしはじめた。

「~~~~~ツ!!!」

御坂が胎児と距離を取ろうとしたとき、胎児へと何か物凄い速度で激突した。

「なっ、なんなの一体!？」

激突の衝撃で粉塵が巻き起こっているせいで、御坂はなにが起きているのかわからない。その粉塵の中から激突した何か、御坂のいる方へと飛び出してきた。

「ッ!？」

驚いて身構えるがその何かは御坂にぶつかる直前で動きを止めた。

「なにビビってたんだよ」

その何かは、先ほど陥没から逃れた天野だった。

「びっ、ビビってないわよ!!失礼なこと言わないでよねっ!」

馬鹿にされたと思った御坂が怒鳴る。

「うるせえな。騒ぐなよ。……それより、しばらく俺がアレの相手はしてやるから、お前はそこでのびてる春生さんを安全なところへ運んでくれ」

怒鳴る御坂を気にせず天野は御坂へと指示を出す。

「なんでよ!アレと戦うなら私の方がやりやすいわ!」

「わかってるって、でもお前の場合は、周りに人がいない方が全力

でやれるだろ。とりあえずは、周りの人間の安全確保が先だ」

「……………わかったわ」

文句を言われると思っていた御坂だが、自分の要求がすんなり通ってしまったため、素直に従うしかなくなってしまった。

「わかったら、さっさと動け」

それだけ言って天野は胎児の方へと走りだす。御坂も天野の指示に従って先ほどの戦闘で気を失った木山を背中に担ぐ。

「あーっ！何なのよあいつ！調子狂うじゃない！」

そのまま御坂も木山を安全な所へと運ぶために動き出す。

「な、何なんですかアレ？」

警備員である鉄装が疑問の声をあげる。

「俺に聞くな」

しかし彼女の同僚から答えは返ってこない。あの胎児のような生物（？）は、突然現れたかと思うと、辺り構わず暴れ出したのだ。それを止めるために、警備員である鉄装たちはここへ来たのだが、木山との戦闘の所為で大半の人間が動けない。

「応援を呼ぶにも、この近くには原子力実験炉がある。なんとかして
もここで食い止めるぞ」

その声に従って、動ける数人の警備員が銃を構える。

「発砲を許可する。撃てえ!!!」

そして、そこにいる人間が一齐に引き金を引いた。銃弾は弾幕となつて胎児に命中してその体を傷つけるが、すぐに再生してしまう。それどころか徐々に胎児の体が大きくなっていく。

「止めるな！撃ち続けろ！」

再び弾幕を張ろうとするが、それより先に胎児と警備員の間割り込むものがあつた。

「何をしている！そこをどくんだ！」

割り込んできたのは鉄装のよく知る少年だった。

「落ち着いてください。アレに攻撃してもすぐに再生します。ここは引いてください。その間、俺がアレを食い止めます」

「あつ、天野くん!？」

天野が警備員に指示を出そうとしていると、その背中に胎児の体から伸びてきた、手（？）のような物が迫る。しかしその手は、砂鉄の剣によって切り裂かれる。

「遅いぞ」

「文句言わないでよね！これでも頑張ったのよ！」

続いて現れたのは少女は、文句を言う天野へと食って掛かる。

「君たち！そこを退くんだ！」

「ああっ。もうっ。俺は野郎に説明するほど元気はない！あとは任せた「つるぺた」！」

説明するのが面倒になった天野が御坂に丸投げする。

「ちよっ、なによそれ！大体あんたが　　ッ！！」

「じゃあな！！」

御坂が文句を言う前に天野はどこかへと走っていつてしまった。

「おい！今すぐ説明するんだ！君！」

目の前にいる警備員から、説明を求めるために怒鳴りつけられ、さらに後ろからは訳の分からない怪物が迫ってきている。そんな状況で御坂がしたことは。

「あんのっ、クズ野郎があああ　　！！」

キレた。

「起きてください。春生さん」

「う……。ん」

木山はその声で意識が覚醒する。

「私は……………?」

「『幻想猛獣（AIMバースト）』の出現の影響で、意思を失って
たんですよ」

天野はそう言って、御坂と戦闘を繰り返している胎児を指差す。

「すごいな。こんなバケモノだったとは……。学会で発表するれば
表彰ものだな」

そこまで言って木山は、ぎよつとした顔で天野を見つめる。

「いやだなー春生さん。そんなに見つめられたら俺照れちゃいますよ」

「……………何で君がアレのことを」

「AIM拡散力場の集合体である虚数学区。まあアレはそれのできそこないってところですかね。『幻想猛獣（AIMバースト）』ってのは、勝手に名付けさせてもらいましたよ」

天野は当たり前のことであるように言った。

「……………名前は構わないが……………。なぜ君はこんなことまで……………」

普段のイメージとはかけ離れている天野の様子に、木山は驚きながらも尋ねる。

「んん？まあいいじゃないですか。そんなことより助けに来ましたよ春生さん」

「助けにきた、か…………。だがもう遅いよ。もはやネットワークは私の手を離れた。あの子ども達を取り戻す事も、恢復させる事も出来なくなってしまうたよ……………」

木山は諦めたように頂垂れ絶望に満ちた声を出す。

「大丈夫です。春生さん。俺は貴女のためなら奇跡だって起こしてみせます」

しかし頂垂れる木山とは逆に天野の声には希望が満ち溢れていた。

「……………奇跡？君はどうやってそんなものを起すというんだい？」

「奇跡を起こすために必要なお宝はすべてそろっています。あとは春生さんだけです。っと、その前にアレを止めなくちゃいけませんね」

天野はそう断言した。

「……………アレを止めるには、アレを束ねている私が死ぬしか」

「死ぬなんて言わないでください！他に方法はないんですか！？」

木山の言葉に天野が慌てながら尋ねる。

「今の私になにを言っても、君は信用できないだろう……………？」

「できます。たとえば貴女がこの街を敵に回しても、たとえば俺を騙そうとしても、貴女のために何度だって信じて見せます」

木山の目を見て天野がそう言った。

「……………アレは『幻想御手』のネットワークによってできた怪物だ。アレを止めるにはネットワークを破壊するしかない」

「どうやれば破壊できますか？」

「それなら彼女が知っているよ」

そう言つて木山は天野の後ろを指差した。そこにはこちらに走つてきている初春の姿があつた。

「先輩！木山先生！アレはいつたい何なんですか！？」

走つてきた初春は息を荒げながら天野と木山に尋ねる。

「細かい説明はあとだ。それよりアレを止めるには、『幻想御手』のネットワークを破壊するしかない。お前に任せられるか」

「はい！」

天野からの問いに初春は力強く頷いた。

「よし。まず何をすればいい」

「コレを！学園都市中にコレを流す事ができれば！」

答えながら初春は小さなチップを天野へと見せる。

「わかつた。でも、普通の方法じゃ無理だな。……………愛穂さんに協力してもらうしかないか」

天野は自分で結論を決めて行動へと移しだす。

「春生さん。俺の背中に乗ってください」

「いきなり何を…………？」

突然のことで木山は首をかしげる。

「あの子たちを救うためにもお願いします」

「……ああ。わかった」

頷いてから木山は天野の背に乗る。木山を背負った天野はそのまま近くにいた初春を片手で抱きかかえる。

「なっ、なにを……!?!」

「ショートカットだよ。喋ってる舌噛むぞ!」

そうして天野はふたりを抱えたまま、黄泉川のある道路よりも高く跳躍した。

「きゃあああああ~~~~~っ!!!」

抱えられた初春が叫ぶがそれを気にせず、そのまま黄泉川の近くへと落下していく。着地するときドンツ、と物凄い音がしたが天野は平然と木山と初春を下ろす。落下の様子を間近で見ていた黄泉川はかなり驚いている。

「だっ、大丈夫じゃん!?!」

「大丈夫です。愛穂さん。それより協力してほしいことがあるんです」

黄泉川の心配を気にせず天野は話を続ける。

「詳しいことはこいつが知ってます。こいつの手伝いをお願いした

いんです」

その言葉に従って初春が黄泉川へと近づく。

「お願いします。協力してください」

「……よくわからないけどわかったじゃん」

「じゃあ、ここはよろしくお願いします。俺はまだやる事がありますから」

そう言いながら天野は再び木山をその背に背負う。

「天野！」

木山を背負ってどこかに行こうとしている天野を黄泉川が呼び止める。

「何ですか愛穂さん」

「こっちは私に任せろ。だからお前はしっかり救ってくるじゃん！」

「はい！」

黄泉川の声を受け、天野は動き出した。

『七月二十四日?』（後書き）

アンケートは一応終了しました。

ご意見ありがとうございます。

結果としては二巻を飛ばして、三巻を少し書いた後に四巻の内容に入りたいと思います。

更新頑張りますので応援よろしくお願いします。

『七月二十四日?』

「なっ、なんでこの子たちがここにっ!？」

木山が驚きの声をあげたのはとある病院の一室。天野が木山を背負ったまま高速で移動して、連れてきたのだ。その部屋はガラスを挟んで二つの部屋が一つになる造りをしている。

「それは彼に頼まれたからだよ?」

同じ部屋にいる医者がそう答えた。その言葉に木山は天野を見て訊いた。

「……どうしてここに、この子たちがいるんだ」

そう言いながら木山は振り返りガラスの向こう側を見つめる。そのガラスの向こうには、数人の子供たちがベットの上に横たわっている。

「いやー。実はですね」

天野は照れくさそうに頭を掻いてから木山の質問に答える。

「とある子供を助けるために、脳について色々調べてる最中にです。ね……。たまたま見つけちゃったんですよね。AI M 拡散力場制御実験と称されて行われた暴走能力の法則解析用誘爆実験の情報を」

木山は天野の言葉に顔を引き攣らせる。まるで思い出したくない過去を無理やり思い出させられるように。

「その情報に乗ってたんですよ。被験者であるこの子たちの事と……、関係者である春生さんの事が」

「どう、やって、その情報を……。普通の方法じゃ辿り着けるはずはない……」

未だ顔は引き攣っているが、木山は、なんとか天野へと尋ねた。

「どうやって、と言われましても……。たまたま辿り着いただけですよ」

しかし天野は木山の問いをはぐらかす。

「……訊いても無駄か……。君はそれを知って私を軽蔑しただろう。自ら傷つけておきながら助けたいのたまう……。まったく傲慢の極みだよ私は……！」

木山は憤るようにその唇を噛み締める。

「……けれど、貴女は知らなかった」

「知らなかったですむ問題じゃないんだ！私が傷つけたんだ……！私の、私の所為で………」

天野の言葉を木山は即座に否定した。そして木山はその場に膝をつく。

「大丈夫です。子供たちは貴女のことを恨んでなんかいません」

ひざまづいている木山を天野はあやす様に抱きしめ、そう言った。

「……………どうして君にそんなことがわかる？」

「わかりません。でも、今から確かめればわかることです」

それではまるでこの子たちが助かるみたいではないか、木山はそう思った。天野は木山の心を見透かしたように言葉を続ける。

「言ったでしょ春生さん。貴女のためなら奇跡だって起こしてみせるって」

そう言った天野は木山の手を取り立ち上がる。

「だから笑ってください。春生さんが笑ってないとこの子たちが不安になっちゃいますから」

「……………」

だがやはり木山の顔に笑みはない。それも当然だろう。どうやって子供たちを助けるかも、わからないのに笑うのは無理な話だ。

「あ……。僕がいることを忘れて欲しいね？」

話が進まないのを見かねて医者が話に参加する。

「君じゃ話が進まないんだね。だから、ここからは僕が説明するんだね？」

と、医者は前置きしてから話し始めた。

「まずはこの子たちの状態についてだがね。非常に危ういと言っている、無理やり能力を暴走させたせいでお互いの脳波が絡み合っているんだね？お互いの脳波が影響を及ぼし合っているせいで、この子たちは目覚めないんだね？」

症状としては『幻想御手』を使用した能力者と同じ様なものだね？と、付け足してから医者は再び説明を始める。

「『幻想御手』と同じなら簡単だったんだがね？この子たちの場合、複数の脳波が絡み合っているせいでそう簡単に目覚めさせることができないんだね？普通の方法でこの子たちを目覚めさせるとなるとこの絡み合った脳波を正しくひもとく事が必要になる。それこそ『ツリーダイアグラム 樹形図の設計者』並みの演算能力がなければ、莫大な時間が必要になるんだね？」

「そつ、そんな……ッ!？」

あまりのショックで木山はその場に崩れ落ちる。天野は崩れ落ちそうになる木山を隣で支える。

「さらにここで問題なのは無理やり目覚めさせることができない、

ということなんだね？無理やり覚醒を促すと暴走状態になる可能性がある、いや、正確にはわからない、というべきなんだね？もしも無理に覚醒させた場合、どのような事態が起きるかわからないんだね？」

医者という言葉が木山の中の希望を、削り取っていくかのように木山の顔から生気が消えて行く。

「……それじゃあ、この子たちは目覚めることはない、しかも、目覚めても無事かどうかわからないのか………」

「そう。普通の方法ならばね？」

その言葉に木山が最後の希望へと縋りつくように顔をあげる。

「その彼の能力？………能力でいいのかね？」

「能力で構いませんよ」

医者からの質問に天野は木山を支えたまま答える。

「その彼の能力『リザレクション起死回生』を使えばこの子たちを助けられるだね？」

「どっ、どっいう………!？」

木山は支えている天野の目を見て尋ねた。

「クシヨン落ちてきてください春生さん。今、説明します。俺の能力『リザレ起死回生』は、自分を含め、触れている相手の自然治癒力を高める能力

なんです。簡単に言うと健康な状態へと導く能力です」

「その能力を応用することで、この子たちの絡み合った脳波に正しい刺激を与えることで覚醒に導くんだね？」

天野の説明に継ぎ足す様に医者があとを続ける。

「つ、つまり!?!この子たちは助かるのか!?!」

「ええ。だから言ったでしょ奇跡だって起こしてみせるって。だから笑ってください。せっかく助け出しても子供たちが笑ってる春生さんを見れなかったら意味がないですから」

今にも泣き出しそうな木山に、天野は満面の笑みで答えた。

「では、始めるとするんだね?準備はいいかい?」

「はい」

医者は子供たちの脳波を、モニタリングしているパソコンの前に座って尋ねた。天野はその問いに頷いてから、木山を連れて子供たちがいる部屋へと入っていく。

「指示はこちらから出すんだね?はじめてくれて構わないんだね?」

その声に天野はひとりの子供の手を十秒ほど握る。それから天野は医者からの指示に従って、子供たちの手をひとりひとり握っていく。特別な決まりがあるのか、触る順番や時間にまで医者は細かく指示を出していく。

そして、その時が訪れた。

始に兆候が起きたのはひとりの少女だった。今までピクリとも動かなかったその手が僅かに動いたのだ。それに気づいた木山はすぐさまその少女のもとへと駆け寄った。それを感じ取ったのか少女が、その閉ざされていたまぶたを開いた。

「……………先生？どうして目の下にくまがあるの？」

その少女が目を覚まして始めて見たのは、泣きそうになりながらも必死に笑みを浮かべる木山春美の顔だっただろう。

「……………うっ。色々と忙しくてね……………うう……………」

「ホントだ。髪ものびてる」

その少女に続いてまたひとり少年が目を覚ます。そして、またひとり、またひとりと子供たちが目を覚ます。

「でも、先生だ」

「木山先生だ」

「お前たち……………」

木山が子供たちを見まわす。そこには何時かのように自分に笑いかけてくれる子供たちの姿があった。

「いいのかい？最後まで一緒にいなくて？」

「知らないんですか先生？いまどきの男は空気が読めないといけないですよ。せつかくの感動のシーン何ですから、俺が邪魔するわけにはいきませんよ」

天野は少女が目覚めたのを確認してから医者のもとに来ていた。

「そうなのかね？……まあ、構わないけどね？」

医者は天野の言葉に首をかしげる。そしてさらに言葉を続けた。

「……そんなことより、これつきりにして欲しいものだね？僕は役者じゃないんだよ？」

「ははっ。いやいや名演技でしたよ。でも、なんなんですか脳波が絡み合っつて？」

天野は呆れたように言った。医者に質問する。

「彼女に知らせたくないから理由を適当にでっち上げてくれと、君が言ったんだね？」

「できれば春生さんには表の世界で笑っていて欲しいですからね。そのためには言えないでしょう？暴走能力の法則解析用誘爆実験が方便で、本当のところは『絶対能力（レベル6）』実現のための『能力体結晶』の投与実験だった、なんて」

天野の言ったとおり、暴走能力の法則解析用誘爆実験すら方便だったのだ。

「『能力体結晶』みたいなできそこないじゃ、『絶対能力（レベル6）』に辿り着く確率なんて砂漠の砂の中から、たった一粒の砂金を見つけ出すようなもんだ。……まあ、そのレベルの確率だったからこそ、今回は簡単に進めることができたんですけどね」

と、天野の話が一通り終わると、どこからか不思議な音楽が流れてきた。

「コレが彼女の言っていた『幻想御手』のワクチンソフトのようだね？」

「そうっすね。飾利のやつちゃんとやったみたいだな。これで『幻想猛獣（AIMバースト）』の問題も解決しただろうし、使用者も目を覚ますでしょう。……って、ことで春生さんの事はよろしくお願ひしますね」

そう言うと天野は部屋から出て行くこととしていく。

「まったく、僕に憎まれ役まで押し付けしないで欲しいものだね？」

医者言葉に天野は嫌そうに頭を横に振ってから答えた。

「いやいや。俺は春生さんに嫌われたくないんですよ。それに、ちゃんと罪を清算しないとあのガキ達のためにもなりませんね」

その言葉に医者はため息を漏らす。そんな医者に天野は得意げに言った。

「どうせ、それが患者のためなら先生は同じことをやったですよ？」

「ん？これは一本取られたようだね？……わかったよ。あとのことには僕に任せるんだね？」

医者は一瞬面食らった顔をするが、すぐに元の顔に戻り頷いた。天野はその顔を見てから部屋をあとにする。

とある病院の屋上。

「ま、初春は初春。危なっかしくて放っておけないわ。やっぱりあたしがついてないとダメね」

「えへっ。エへへへへへ」

植物状態から回復した佐天と初春は話していた。そんな二人の様子を天野、御坂、白井の三人が眺めている。

「よかったですの。佐天さんが回復して」

「そうよね。って、あんたよくもあの時、私に投げっぱなしにしたわね……………!」

「怒るなよ。何とかなったんだからいいだろ？それに俺も色々働いてたんだぞ？」

「よくないわよ!」

『幻想猛獣（AIMバースト）』の時に、押し付けられたことで御坂が天野へと突っかかる。そんな天野達のもとへと、佐天と初春が近づいてきた。

「でも、何とかなってよかったです。御坂さん白井さん、それに天野先輩もありがとうございます」

「いいんですよ初春。こんなゲス野郎にお礼をする必要なんてありませんの」

「そうよそうよ」

天野にお礼を言う初春を、白井と御坂が諫める。

「あつ、あの……………ッ！天野さんありがとうございます……………!!」

そんなやりとりを繰り返している初春たちを気にせず佐天は、お礼を言いながら天野に頭を下げた。初春たちはいきなりの佐天の行動に驚いている。

「あの時、天野さんが『ちゃんと考えて使え』って、言ってくれて……」

佐天は頭を下げたままそう言った。最初は事態を理解できていなかった初春たちだが、佐天のその言葉に事態を理解する。そして、真つ先に御坂が天野に怒鳴る。

「あんたっ！！佐天さんが使っつて知っつてて止めなかったのっ！！」

「いいんです御坂さん」

「でっ、でも……！？」

怒鳴る御坂を佐天は頭をあげて諫める。御坂はなぜ佐天がそう言うのか理解できないので戸惑いの表情を浮かべる。

「いいんです」

と、もう一度言ってから佐天は話し始めた。

「天野さん。あたし天野さんに言われた通りよく考えたんです。副作用の事も調べました。使ったら倒れちゃうっつてことも……。でも、使ってみたかった。『能力者』はあたしの憧れだったから……」

佐天の言葉を天野は黙って聞いている。御坂たちもなにも言えず、静かに佐天の言葉に耳を傾ける。

「だから使っつてしましました。本当は怖くて友達を誘っつか迷いまし

た……。でも、自分で決めたことだったから、誰かを巻き込むのは間違ってるって……。だからひとりで使いました。そしたら能力が使えたんですよ！あたしは『無能力者（レベル0）』じゃなくなってる嬉しかった！……。でも、急に怖くなったんです。自分で決めたことなのに、倒れちゃうってこともわかって使ったはずなのに……。あまりにも怖くて初春に電話しちゃいました……。」

そこで佐天は恥ずかしそうに初春を見つめた。

「すつごく怖かったです……。もう目覚めないんじゃないかって……。でも、怖かったけど、後悔はしていません。自分でちゃんと考えて使ったんです。天野さんが『ちゃんと考えて使え』って、言ってくれたおかげです。それに能力を使えるようになって気付いたんです。今まで自分が諦めてただけなんだなって……。自分の可能性を自分で捨ててたんだなって。今回は『幻想御手』の力を借りたけど、今度はあたし自身の力で能力を使って見せます。こんな風に考えられるのも天野さんのおかげなんです。だから、あ
りがとうございました」

佐天は吹っ切れたのか清々しい笑顔でもう一度、天野に礼を言った。そんな佐天の様子に気まじくなつた御坂が天野に謝る。

「……。その。悪かったわね。怒鳴って、あんたがそこまで考えてるとは、思わなかったわ」

と、御坂が頭を下げる。他の白井と初春もいつもと違って尊敬の眼差しで天野を見る。そんな佐天と御坂たちに天野が一言。

「俺、そんなこと言ったけ？」

「「「……………」」」

佐天を除く三人の表情が完全に凍りつく。それでも佐天は天野がそう言うことを予期していたかのように笑っている。

「どお？」

「正面玄関付近に人影なし！！ですの」

御坂と白井は常盤台中学学生寮の前で息をひそめていた。本来なら普通にはいれればいいのだが、今回はそうはいかない。なぜなら門限を過ぎているのだ。

「融通の利かないあのお方の事。二人揃って不在がばれればどんな目に合うか……」

ふたりは、そろりそろり、と玄関へと近づいていく。

「へえ〜。そんなに怖いのか？」

「ええ。それはもう怖いというレベルではないですの」

「まったくよ。……って、なん……ッ!?!……何であんたがここにいるのよ？」

いつの間にか現れていた天野に御坂と白井が大声を出しそうになるが、何とか声を押さえて天野へと尋ねる。天野はそれを気にせず答えた。

「ん？そりゃあ、普段お前らが恐れてる、血も涙もないひとでなしの行け後家で賞味期限切れ目の女性ひとにあってみたくって」

「ほう。それはいつたい誰のことだ？」

事情を知らない天野を除いて、御坂と白井が一瞬で姿勢をただしその場に直立する。

「で、いつたい誰のことだ？白井」

「いつ、いえ！？けっ、けっして寮監様の事では……！？」

全身に冷や汗をかきながら白井は何とか誤魔化そうとする。御坂も声こそ出していないが、肯定するために全力で首を縦に振る。

「おいおい。普段と言ってることが違うじゃねえか。白井」

「ちよっ、ちよっとお黙りさない……ッ！？」

天野の言葉に白井と御坂はさらに冷や汗を流す。白井は何とか止めようとするが、この状況で能力を使えば寮監になにをされるかわからない。言葉で必死に止めようとするが天野は止まらなかった。

「こんな綺麗な女性ひとが血も涙もないひとでなしの行け後家で賞味期限切れ目の訳ないだろうがっ！！」

「「えっ！？」」

「「……………ッ！」」

予想外だったのか御坂と白井、それに寮監までが驚く。

「ああ！なんて綺麗なんだ！貴女のような人が寮監をやっていると知っていたら、もっと早く会いに来ていたのに……！いえ。過去の事を言っても仕方ありません。これから大切です。これから一緒に食事でもいかがですか」

天野は驚いたままの寮監の手を掴んで尋ねた。寮監はその手を見てから、白井と御坂たちの方を見る。

「これはなんだ……？」

「「いつ、いえ……。これは……」」

寮監の問いに御坂と白井が完全にシンクロした動きを見せる。

「おっと！俺としたことが名前を訊き忘れていました。お名前はなんというのですか？」

御坂や白井を完全に無視して天野が寮監に質問を続ける。

「……見知らぬ者に名乗る名はない」

普段と打って変わって動揺しているかのような寮監の返答に、御坂たちは驚きの表情を浮かべる。

「そうですね。まだ、お互いのこと知りませんもんね……。しかし、だからこそお互いを深く知りあうためにもお名前を教えてください。貴女のように美しい方のお名前です。きっとお名前も美しい

に決まっています。さあ、聞かせてください」

「うっ………」

天野は嬉々として寮監へと顔を近づける。寮監はそんな天野に明らかに動揺した様子を見せる。そして寮監は助けを求めるように御坂たちを見る。

「……………」

しかし返ってくるのは沈黙だけだ。と、いうより普段どおりなら、天野なら制裁を加えて止めているのだが、あの寮監を相手にしても通りの行動を起こす天野を驚きと尊敬のまなざしで眺めていたのだ。

「お願いします寮監さん。貴女のように美しい人の事を知らずに生きて行くなど耐えられません！」

天野は御坂たちが止められないため、普段より一層と激しい行動に始める。そんな天野に寮監は。

「ええいつ！！面倒だっ！！」

「えっ！？なにを……！！？」

事態を処理しきれなくなった寮監が天野にヘッドロックを決めて、一気に落とす。

「…………ふう。おい。御坂、白井これはいったい何だ」

イレギュラーである天野を排除した寮監はいつも通りの低い響きを持った声を出す。

「わっ、わたくしの風紀委員の、せつ、先輩ですの……」

「……そっ、そうです。いつ、いつの間にかついて来てたんです。ふたりは何か弁明する。……するが、それにどれほどの意味もないことをふたりは知っている。」

「そうか。では、これは私がかたずけておこう。それでお前たちには……」

あれ？もしかして私たち助かる？と思つた御坂たちだが。

「罰が必要なな。そうは思わんか？ん？」

あつ、やっぱり駄目だったみたい……。諦めたように御坂と白井が頂垂れる。と、そのとき、寮監の腕の中で気を失っていた天野が目覚めます。

「やべっ！？いつ、今何時ですか！？」

「はっ、八時半過ぎだが……」

まさか自分のアレを食らつてすぐに復活するとは思っていなかった寮監は驚いて天野から手を離して答える。

「……あと三時間ぐらいか。すみません。ちょっと、やらなきゃいけないことがあるので、俺はこれで。寮監さんお食事はまた今度」

突然、目覚めたかと思うと、勝手に自己完結して天野はどこかへ行ってしまった。

「「「……………」」」

残された三人はなにがなんだかわからずその場に立ち尽くす。

『七月二十四日?』

「どちらへ?」

神裂は子萌の住むアパートから立ち去る上条に尋ねた。

「いいか分つかんねーようなら、一つだけ教えてやる。俺はまだ諦めちゃいねえ」

上条は傷だらけの体を無理やり動かして歩を進める。

「1000回失敗したら、100回起き上がる。10000回失敗したら、10000回這い上がる!!!」

その身に巻かれた包帯を引き千切り、痛みに顔を歪めるが上条の足はそれでも止まらない。

「たったそれだけの事を、テメエらにできなかつた事を果たしてみせる!!!」

「残り二時間余り、何をするつもりか知り得ませんが
素敵な悪あがきを」

神裂は立ち去る上条の背中を、自分の過去と重ねるように見つめる。

「……………いつまで隠れているつもりですか?」

しばらく上条が去った後を見ていた神裂だったが、突如そんなことを呟いた。

「あれー？おつかしいなー？気配は消してたつもりだったのに……？はっ！やっぱり俺たちは運命の赤い糸で結ばれてるんじゃない！」

そんな呟きに応えるように、いつの間にか神裂の背後に天野が立っていた。

「こんな状況でも、ふざけているのは流石と言つべきでしょうか……」

神裂は呆れたように言ってから天野のいる方へと振り返る。そんな神裂の言葉に天野は首をかしげる。

「こんな状況？」

首をかしげている天野に神裂が残された時間を告げる。

「……分かっていてでしょう。アナタ方に残された時間は、あと二時間余りですよ」

「大丈夫大丈夫。二時間もあれば余裕で救つてやれるぜ」

しかし、それでも天野の顔に変化はない。むしろまだ余裕があるかの様にさえ見える。

「冗談はそこまです。貴方に期待した私が愚かだったのです」

嘆くように言う神裂。期待と言うほど期待していた訳ではないが、それでもあの時の傲岸不遜な態度に僅かな希望を見ていたのも確かなのだ。

「そんなに拗ねるなよー。火織ー」

そんな神裂の様子を拗ねていると勘違いした天野がそう言った。

「……拗ねてなどいません。ただ愚かな自分自身に呆れているのです」

「ありやりや？ そうなの？ てつきり、三日もほっといたから拗ねてるのかと思っただのに……。残念」

本当に拗ねているかと思っただけなのか天野は残念そうに肩を落とす。そんな天野の様子に神裂は拳を強く握りしめる。

「貴方は余程、私を馬鹿にするのがお好きなようですね……！！」

怒気を孕んだその言葉に天野の表情に真剣さが増す。

「違う違う。俺は真剣だぜ」

「何が違うというのですか？ 今までの貴女のふざけた態度を鑑みれば、言い逃れはできない筈ですが」

答え次第では、いつでも斬りかかるとばかりに、神裂は腰に提げた日本刀の柄へと手をかける

「だって俺が火織を救っても、救ったときに火織が笑ってないと思

味ないじゃん」

「……………まだ救えるというつもりですか」

予想外の答えに神裂はつい尋ねてしまった。

「ああ。もちろん。今から火織を救ってやるよ」

神裂の問いに嬉しそうに答えた天野は、そのままインデックスのいる部屋のドアを開けて足を踏み入れる。

「……………今度は君か。彼ならつい先ほど逃げ出したよ」

部屋の中にはインデックスとステイルがいた。ステイルはいきなり入ってきた天野に向かってそう言った。

「いやー。俺の敵がそう簡単に諦めるとは思えんけど……………。まっ、いっか。どうせ俺が救うのは火織と……………。まあ、一応お前も救ってやるよ」

天野はその言葉に少し考えるが、やはり気にせずそう宣言した。

「救う？ふん。笑わせるなよ！君がどうやって僕たちを救うというんだっ！！」

その宣言にステイルは敵意を込めてそう応えた。そんなステイルの様子に天野は心底嫌そうに答える。

「そう急かすなって。男に急かされても鳥肌が立つだけなんだよ。ほら、今から救ってやるから黙ってそこで救われる」

天野はステイルのそばで眠っているインデックスに近づく。

「ほら。起きろ。インデックス」

「おい！何をしているんだ！！」

インデックスに近付いた天野はその頬を叩いて覚醒を促す。そんな天野をステイルが怒鳴りつけるが天野は気にせずインデックスを起そうとする。

「うっせーな。落ち着けて、変なことはしねーよ」

「んっ。うん……。あまの？」

ステイルの怒鳴り声が聞こえたのか、インデックスが目覚める。

「おう。気分はどうだインデックス？」

「うーん。最悪かも……」

天野の問いにインデックスはすこし考えてそう答えた。

「はははっ。じゃあ、「先輩」である俺が今から面白い話を聞かせてやるよ」

「うん。面白い話にしてね……。あまのっ！？」

寝ぼけていた意識がやっと覚醒したのか、魔術師たちに気付いたインデックスが勢いよく起き上がる。しかしそんなインデッ

クスの額を天野が抑えて、起き上がれないようにする。

「暴れるなって、大丈夫だから」

「でっ、でも……!!」

それでも起き上がるうとするインデックスを天野がなだめる。起き上がれないことを悟ったインデックスは、精一杯の抵抗として魔術師たちを、敵意の籠った視線で射抜くように見た。

「……………」

その視線に神裂とステイルは辛そうに唇を噛み締めている。

「大丈夫だつて。敵じゃねえよ。この俺様が話をするんだからギャラリーは多いほうがいいだろ？」

「……………」

危険な状態にもかかわらず、平然としている天野に諦めたのかインデックスは静かになる。

「うんじゃあ、はじめぞ」

インデックスが静かになったのを確認すると天野が話を始めた。

「とある所に一頭の子羊がいました

その子羊は王様の命令で、その銀色の毛に包まれたその身の内に『悪魔の力』を宿し、その『悪魔の力』を守っていました。しかし、

王様はその子羊を恐れしました。なぜなら羊には悪魔の象徴たる角が生えているのです。そしてそれは子羊でも同じことです。

そこで王様は子羊の角を切り落とし、王様の言いなりにする方法を考えました。そんな王様に一匹の老獺な狐が言いました。

「それなら妙案がありけるのよ」

狐が考えた策はこうです。力で抑えても『悪魔の力』を有する子羊には効きません。そこで子羊の『記憶』と『心』を縛る『首輪』を子羊の首につけたのです。

『記憶』とは知識の集まりです。知識が集まればその分、王様へとその悪魔の象徴たる角を向ける可能性が増えるのです。だから狐はその知識の集合体である『記憶』を奪う事にしたのです。

続いて狐は『心』を縛りました。その二つの役目を与えられたのは真っ白なカラスと心優しきライオンでした。カラスとライオンはその子羊と『友達』になりました。そうすることで子羊が王様を裏切ることを防ぐのです。

そして狐は狡猾でした。『友達』になった子羊のためにカラスとライオンが王様に齒向かはないように、子羊が生きるためには、定期的にその『記憶』を『殺す』必要があると嘘をついたのです。

必ず来る不幸わかれを知ってもカラスとライオンは子羊と『友達』であることを選びました。忘れてしまわぬほど幸福な思い出を作ろうと…。一度でダメならもう一度、それを何度も何度も繰り返しました。…しかし、それでも全てがゼロに還る。

何度繰り返しても子羊がカラスとライオンに向ける瞳には敵としてしか映りません。カラスとライオンはそのたびに誤解を解き幸福を積み重ねようと努力します。しかしそれはいつまでも続きまきませんでした。

絶対に報われぬ幸福てあを与えることより、必ず訪れる不幸わかを軽減する事を選んだのです。

敵である事を認め、『友達』である事を諦めた真つ白なカラスは絶望で身を焦がし、白かったその姿は真つ黒に染まってしまいました。心優しいライオンも不幸に怯え、その手を差し伸べる事が出来なくなってしまうました。

カラスとライオンがどれだけ絶望に浸ろうとも、物語は進んでいきます。

そんな絶望を幾度か繰り返したとき、子羊がとある羊飼いと出会いました。

………あー、もうメンドイからここまででいい？」

話すのが面倒くさくなったのか天野は話す事を放棄した。正直、色々突っ込みたい所はあるがそれでもなぜか聞き入ってしまった。内容に関しては今どき小学生でも、もうちょっとまともな話を考えられる気がするが、それでも話を聞いているのは、魔術師である。魔術師は絵や物語から魔術的記号を見つけ出す事を得意とする。いや、必須スキルであると言ってもいいだろう。その魔術師が訊けば

そこにどんな意味があるか読み取ることなど造作もない。

「……………それって私の事……………?」

全ての者が沈黙する中、インデックスが重い口を開く。

「ああ」

「……………」

インデックスからのその問いに天野は即答する。しかし、突拍子もない話をいきなり言われても納得できるはずもない。

「信じられないか?」

そんなインデックスに天野が尋ねる。インデックスは何か言おうと口を開くが、すぐに閉じて小さく頷いた。

「なら、本人たちに訊いてみるといいさ」

そう言って天野は魔術師たちの方を見る。インデックスも同じようにそちらを見た。

「……………本当なの……………?」

インデックスの問いに魔術師たちは答えない。

「……………」

自分たちには、そんな資格は無いのだと言い聞かせるように唇を噛

み締める。そして本当に大切な何かを諦めたような、辛そうな笑みを浮かべ、ガチン、と。自分の中のスイッチを切り替えたかのようにその瞳をそして心を凍らせる。

「ありがとう」

しかしインデックスの一言が魔術師たちの決意と覚悟を一瞬で打ち砕いた。

「ありがとう。ごめんね。そんな辛そうな顔をするほど、私と一緒にいてくれたんだね……。だけど私にも覚えてないんだ……」

「そっ、それは　　ッ!？」

とっさに神裂が叫ぶが、インデックスはそれを即座に否定する。

「ううん。……確かに目が覚めて記憶がなくて怖くて苦しかった……。でも、それは貴方達も一緒だったんだね……。貴方達のおかげで私はとうまやあまのに出会えた。怖くて苦しかったけど貴方達のおかげで私はここで笑っていられる。だからもう一度『友達』になつてくれないかな？」

そう言つてインデックスは起き上がろうとするが起き上がれない。それでも『友達』へと手を差し伸べる。その姿は構図こそ逆であるが、キリストが病める者へと手を差し伸べる姿のようだった。

そして魔術師たちはその手を取る。

その凍りついた筈の瞳からは、凍りついていた何かが溶け出す様に涙が溢れる。

「おいおい。泣くのはまだ早いぜ」

そんな魔術師たちに天野は肩をすくめて言った。そしてまさにタイミングを見計らったとばかりに、部屋のドアが勢いよく開けられた。

「インデックス!!」

まさに絵本の中の主人公のように最高のタイミングで現れた上条は様子がわからず一瞬驚いた表情になる。そんな上条に向かって天野が言った。

「やっと来たのか『俺の敵^{ヒロ}』。舞台は整ってるぜ。さっさと全部救って終わらせようぜ」

天野の言葉と魔術師たちの涙で状況を理解した上条は、その魔術師たちへと頭を下げた。

そして

「頼む!魔術師!インデックスを助けるために力を貸してくれ!!」

『七月二十四日?』

部屋に戻ってきた上条は話を始めた。話の内容を大きくまとめると四つ。

『完全記憶能力』を持っていても死に至る事は脳医学上絶対にあり得ない事。

教会が、元々何の問題もなかったインデックスの頭に何か細工した可能性がある事。

『異能の力』であるならば神様の奇跡システムでさえも一撃で打ち消す事のできる『幻想殺し』イメージブレイカーを右手に有している事。

その右手で何度かインデックスに触れたが何かを打ち消した反応は無い事。

脳医学の話は上条が、子萌先生から訊いた話を説明しただけでは、説得力がなかったたので、天野が事前に調べていた資料を使ってなんとか説明した。上条の右手についても既にステイルが体験しているので問題なかった。

そして一番の問題。

インデックスに施された細工とは何か。その対処法は何か。これに伴ってインデックスにその右手で幾度か触れている事も説明した。それらの事から魔術師たちが導き出した結論は。

「おそらく彼女に施されている細工は、目ごろ目につかない所に施されているだろう。つまり、彼女の体内。それも脳に近いところだ」
ステイルはそう結論付けた。神裂も同意するように頷いた。

「おいおい。いくらなんでも頭蓋骨の内側に魔法陣でも刻んである、とか言われたらどうしようもないぞ」

上条は頭を抱えた。上条の右手に『異能の力』を打ち消す力があっても、そんな場所にあるモノに雑菌だらけの生身の指が触れている場所ではない。第一、今から頭を開いていけば、インデックスの方が先にタイムリミットが来てしまう。

「……」

上条、そして魔術師たちは頭を悩ます。本来なら魔術のエキスパートであるインデックスの力を借りるべきなのだが、肝心のインデックスは限界が近いのかまともに思考できる状況ではないのだ。

「口の中だ」

重たい沈黙を破ったのは天野だった。

「……なぜ、そう言いきれるのですか？」

そんな天野に神裂が尋ねる。

「簡単だ。火織たち、つまり魔術師たちは基本的に科学を信じていない」

一旦、天野はそこで確認するかのように神裂たち魔術師の顔を伺う。魔術師たちは天野の意見を認めるように頷いた。天野はそれを確認してから話を続ける。

「魔術師は科学を信じていない。そして、そんな奴らが科学の対極に位置する筈の魔術的細工を施すために、わざわざ科学の力を借りて頭を切って、頭蓋を削ってまで魔法陣を施す筈がない」

「……貴方の意見はもつともですが、なぜ口の中に？」

神裂は天野の意見を認めたとうえで、更に質問する。これには彼女の大切な『友達』であるインデックスの命が懸っているのだ。慎重にならざるを得ない。

「んん？まつ、勘違ってやつだよん火織。……まつ、まあ、頭を切り開くわけじゃないんだ。口を開いて確かめればいいだろ？」

勘、と答えた天野を神裂が睨む。その視線を受けて天野は言い訳するようにそう言って、インデックスへと近づいた。

「ほら。今から確かめるぞ」

天野はインデックスの唇の間に、親指と人さし指を滑り込ませて、強引に彼女の口を開いた。

喉の奥。

『脳』に近く、滅多に人の目に触れず、そして何より人に触れられる事のない場所。その赤黒い喉の奥に、不気味な紋章マークがただ一文字、真っ黒に刻まれていた。

「ブンゴ」

天野が呟く。それに他の三人が確認するようにインデックスの口の中を覗き込む。その喉の奥にある真っ黒なそれに三人は息をのむ。そして魔術師たちは騙され、『友達』を傷つけた事を悔いる。上条は目の前で苦しんでいる女の子を助ける事ができる事に歓喜に震えていた。

「これで決まりだな。教会は火織たちを騙していた。インデックスの『記憶』を『殺す』必要は無かったんだ」

インデックスの口から手を抜き、天野は魔術師たちの方を見る。そして、最後に確認するように魔術師たちへと告げた。魔術師たちは後悔の念に打ちひしがれそうになる。そんな魔術師たちの背中を上条が思い切り叩いた。

「　　ッ!?.....何をするんだ?」

「シケたツラしてんじゃねえよ。テメエら、ずっと待ってたんだろ? インデックスの記憶を奪わなくて済む、インデックスの敵に回らなくても済む、そんな誰もが笑って誰もが望む最っ高に最っ高な幸福ツビーエンドな結末ってヤツを!」

上条はそこで天野を見る。天野はその先を促すように肩をすくめた。

「しかもテムエらは、またインデックスの『友達』になれたんだろ。ははっ、最っ高の展開じゃねえか。英雄なんて必要ねえ。たった一人の『友達』を助けてみせるって誓ったんだろ？ だったら命をかけてたった一人の『友達』を守る、そんな魔術師になってみせるよ！」

魔術師たちから表情が、消えた。

そして、後悔に埋め尽くされていた顔からは強い覚悟見てとれる。その覚悟は、インデックスの『記憶』を『殺す』と決めたときの、凍りついた覚悟とはまるで違う。どこか温かい、それでいてとても熱い覚悟だ。

「手を伸ばせば届くんだ。いい加減に始めようぜ、魔術師！」

そうやって上条はインデックスへと一歩踏み出した。

「君に言われるまでもない」

まずステイルが上条と並ぶように一歩踏み出す。

「僕はそのためならだれでも殺す。いくらでも壊す！ ずっと前にそう決めたんだ。だから彼女を縛る『首輪』ぐらい壊してみせる！
Fortiss931!!」

「貴方に言われるまでもありません」

それに続くように神裂も一歩踏み出した。

「誰のためでもなく、彼女のために名乗る事ができるのです。今、名乗らずにいつ名乗るといふのです。Salvare 00
0!..!」

そして今まで敵同士だった三人が肩を並べて立つ。たった一つの目的、目の前で苦しんでいる女の子を助けるために、救うと心に決めた『友達』を救いだすために、そのたった一つの目的のために三人は共闘を選ぶ。

「……まったく、イイところ全部持ってきやがって」

並び立つ上条に天野は残念そうに言った。

「悪いな。でも、この二人を救ったのは間違いなくお前だけ天野」

「まっ、ここに立つべきなのは、お前だけ『俺の敵』」

上条はインデックスの隣へと進みでる。天野は上条と入れ替わるように、魔術師たちと肩を並べる。

「気をつけるんだな能力者。何らかのトラップが仕掛けられている筈だ」

スタイルは背を向けている上条へとそう言った。

「なんだ心配してくれるのか?.....だけど、やる事は変わらねえだろ」

「ふん」

そう言った上条に、ステイルは小さく鼻を鳴らした。上条はそれを肯定と受け取るかのように、インデックスの口元へと右手を近づける。

「……、」

上条は一度だけ目を細めると、意を決してインデックスの口、そして喉の奥へと一気に指を突き入れた。指先に静電気が散るような感覚を感じると同時、

バギン！と。上条は右手ごと後ろへと吹き飛ばされた。

「がっ……………！？」

吹き飛ばされた上条を後ろにいた天野が支える。支えられた上条の右手からは、治りかけていた傷口から血が流れ出ている。

「……ッ！？」「」

二人は次の瞬間。はっ、と魔術師たちの息をのむ音を聞いた。

魔術師たちの視線の先を見ると、倒れていたはずのインデックスの両目が開き、その眼球の中に浮かぶ、血のように真っ赤な魔法陣の輝きが見えた。

まずい、と思うより先にその魔法陣は更に輝きを増し、何かが爆発した。その爆発で四人が壁へと激突する。

「 警告、第三章第二節。 Index - Librorum -
Prohibitorum インデックス 禁書目録の『首輪』、第一から

第三までの全結界の貫通を確認。再生準備……失敗。『首輪』の自己再生は不可能、現状、一〇万三〇〇〇千冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

爆心地にいた筈のインデックスはいつの間にか立ち上がった。しかしその瞳には、いまだ真紅の魔法陣が浮かんでいる。

「……………、そっぴゃあ、一つだけ聞いていなかったっけか」

上条はボロボロになりながらも立ち上がる。それに続くように、天野、魔術師たちも立ち上がり目の前の敵を見定める。

「超能力者でもないテメエが、一体どうして魔力がないのかって理由」

その理由。インデックス自らが魔術を行使して教会に反逆する事を防ぐ。そして何より、インデックスの『首輪』を外そうとする者の口を封じるための、自動迎撃システムを組み上げるために、インデックスの魔力はそのシステムに注ぎ込まれていたのだ。

「『書庫』内の一〇万三〇〇〇千冊により、防壁を傷つけた魔術の術式を逆算……………失敗。該当する魔術は発見できず。術式の構成を暴き、対侵入者用の特定魔術口カルウェボンを組み上げます。侵入者個人に対して最も有効な魔術の組み合わせに成功しました。これより特定魔術『セント聖ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊します」

その言葉の意味を知るに魔術師たちが叫ぶ。しかし、上条が動くより早くインデックスの両目の魔法陣が一気に拡大し、魔法陣が重なり合い黒い亀裂が生じる。その黒い亀裂の中心から

ゴツ！！と。光の柱が襲いかかってきた。

たとえるならレーザー兵器。太陽が溶け出したような純白の光が上条を襲う。

「くそ……………ッ！？何だこれは……………ッ！？」

襲いかかる光の柱を上条は右手で防ぐ。しかし圧倒的な光量のそれは右手で触れても消える事は無い。単純な『物量』だけではなく、一粒一粒『質』の違う光の粒の所為で、上条の右手でも消しきれないのだ。

「くっ！！押し負ける……………ッ！！ ……！？」

じりじり、と。押されていた上条の背中を天野が支える。そして天野が叫ぶ。

「火織！！！」

「わかっていきます！！！」

その叫びに応じるように神裂が、七本の鋼系ワイヤーを用いる『七閃』でインデックスの足場を崩す。

インデックスの『眼球』と連動していた魔法陣が、インデックスが体勢を崩したせいで天井へと向いた。それはまるで巨大な剣を振り回したかのように、壁を裂き、天井を貫き、夜空を割り、大気圏外の人工衛星すら引き裂いてしまった。

「こいつは『竜王の吐息』ドラゴンブレス」

伝説にある聖ジュージセントのドラゴ

ンの一撃と同義だ！人の身では耐えきれないぞっ！！」

ステイルの言葉を聞きながら、上条はインデックスの元へと一気に走ろうとする。

だが、それより早く巨大な剣が振り下ろされた。上条が、また捕まる！と、身構えた瞬間、『光の柱』へと別の右手が突き出された。

「天野ッ！！」

上条が叫んだ。

「問題ねえよ俺の敵ヒト！！」

天野の右手に触れた『光の柱』は色を変えて、闇が光を飲み込むように、黒い光が『光の柱』を侵食していく。上条は天野のその言葉だけで、天野の言わんとする事を理解し、走り出す。

「警告、第六章第十三節。新たな敵兵を確認。戦闘思考を変更、戦場の検索を開始……完了。現状、最も難度の高い敵兵『上条当麻』の破壊を優先します」

上条を狙うように、インデックスが『光の柱』ごと首を振り回そうとするが、その『光の柱』を天野が掴んで固定する。上条は無防備なインデックスの元へと、一直線に向かう。

「ダメです 上！！」

あと一步と言う所で神裂が叫ぶ。

光の羽。

走る上条が見たのは粉雪のように降り注ぐ、何十枚もの光り輝く羽だった。

それでも上条は止まらない。

背中を任せるに足る宿敵を知っているからだ。

「
魔女狩りの王！！」
イノケンティウス

光の羽から上条を守るように炎の巨人が両手を広げ、その身でその光る羽を受ける。

「
警告、第二十二節第三章。同魔術による侵攻を確認。逆算を開始……完了。対術式を組み込み中……第一式、第二式、第三式。命名、『神よ、何故私を見捨てたのですか』完全発動まで五秒」

黒い光に侵食されていた『光の柱』が純白から、鮮血のような真紅へと変化していく。そして真紅の光が黒い光を逆に侵食し始める。

「アメエんだよッ！！」

今度は黒い光が色を変え真紅の光を飲み込み始める。と、思えば真紅の光も色を変え逆に飲み込もうとする。

二つの柱が互いに色を変えながら拮抗する。

「この物語が、神様の作った奇跡の通りに動いてるってんなら
せかい アンタ システム

「
上条はインデックスの元へと辿り着き、その右手を構える。

「
まずは、その幻想をぶち殺す!!」

そして上条はその右手を振り切った。

上条の右手は黒い亀裂ごと、それを生み出す魔法陣をあつさり引き裂いた。

「
警、こく。最終………章。第、零 ……。』
首輪、『致命的な、破壊………再生、不可………消』

インデックスの声が途切れた。

そこにいた全ての人が安堵のため息を漏らす。これで全てが終わったのだと安堵する。だが、その安堵の心を嘲笑うかのように運命の歯車が動き出した。

上条当麻の頭の上に、一枚の光の羽が舞い降りた。

安堵した心が生んだ僅かな隙。その僅かな緩みを逃さぬように舞い降りたそれに、上条が床の上に倒れているインデックスに覆い被さるように倒れ込んだ。

それだけではまだ足りない、と。言つかのように、僅かに残った光の羽も上条へと降り注ぐとする。

しかし、それは魔術師たちが掲げる『魔法名』に賭けて阻止する。

そんな中、天野が呟いた。

「……つたく、どんな理由があっても、誰かが『死ぬ』ってのは、嫌なもんだな……」

天野の独白は、誰の耳にも届く事無く虚空へと消えて行く。

『七月二十四日?』(後書き)

一応、これで原作の一卷終了です。

次は三巻のところを少し、書いて四巻に行きたいと思っています。

『暗部?』(前書き)

ようやく更新です。

大変お待たせしました。

しばらくは安定して更新できるように頑張ります。

『暗部？』

とある施設にて。

「降りてこい！コラアツ！！」

統括理事会直下の実行部隊。学園都市の闇に所属する暗部組織の一つ『アイテム』のリーダー。超能力者の第四位『マルチタウナー原子崩し』の麦野沈利が吠えた。

「まだ勝負はついてねえぞ！！」

勝負の相手は、『とある理由』でこの施設を襲撃していた麦野と同じ超能力者の第三位、御坂美琴だ。麦野はその能力名の由来になっている『粒機波形高速砲』を御坂がいる方へと撃ちだす。

「チツ。逃げやがったか……ッ」

しかし反応がない。どうやら逃げたようだ。それに麦野は苛立ちを隠さず舌打ちする。麦野は戦闘の所為で服がボロボロになっていて頭からも血が出ている。更に最後の落下で足にも怪我している。

「麦のんおっひさ」

そんな麦野にかまわず突然後ろから声をかけられる。麦野はこのふざけた呼び方をする男を知っている。苛立ったようすで麦野は振り返る。

「……何で、お前がここにいるのよ？」
『バットエンド 等活地獄』。お前もなんかの仕事かしら？」

苛立った様子で尋ねる麦野に、『バットエンド 等活地獄』と呼ばれた男は嬉しそうに答えた。

「うーん。できれば天野って呼んで欲しいんだけど……。まっ、それよりアレだけイヤがつていた「麦のん」を普通に受け入れてくれるなんて、もうっ、麦のんカワイイ。まったく麦のんってば、ツンツン、デレデレなんだから」
ブチッ！！

嬉々とした天野は何か引き千切れるような音を聞く。しいて何が切れた、と。言えば麦野の堪忍袋の緒が切れた音だろう。

「ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

ブツ切りにそう言った麦野は、特大の『粒機波形高速砲』を天野に撃ちだした。その一撃は天野を丸ごと飲み込んで壁に特大の穴をあける。

「……効かないって知ってるだろ麦のん？まあ、麦のんからの愛「しゅんまなら全部受け止めてみせるぜ」

それでも天野は平然とその場に立っていた。それどころか更に嬉々とした様子で麦野に近付いてくる。

「誰がお前のコト愛しているだゴラァッ！ブチコロスぞ！！」

誰もそこまで言っていないのだが、キレている麦野は気にしない。

「おいおい。麦のんみたいに可愛いレディがそんな言葉遣いはダメだ、ろつと　　っ」

天野はキレている麦野に近づいたかと思うと、麦野をお姫様抱っこ
の形で抱き上げる。

「　　えっ……！？おっ、おい！？なにしてた、はっ、はな
せっ！？」

突然抱きかかえられた麦野は、驚いたのと恥ずかしいので、先ほどの怒りを忘れて天野の腕から逃れようとする。

「暴れるなよ麦のん。足怪我してるだろ？」

「はぁ………！？こんなもん怪我の内に入らねえんだよ！すぐに離
さねえと至近距離で太いのブチ込むぞ………！！」

麦野は今度は突然心配してきた天野に少々間抜けな声を出してしま
う。しかし、すぐに我に返って怒鳴る。続いて心臓に照準を定める
ように、自分を抱きかかえている天野の胸板へと指先を突きつける。

「だから意味ないって。ほら、ココにいる用もないだろ？さっさと
出るぞ」

「……………チッ」

しかし、麦野の脅しなど気にせず天野は麦野を抱えたまま歩き出す。そんな天野に麦野は諦めたように小さく舌打ちした。抵抗がいきなり無くなったので、天野は不思議そうに首をかしげる。

「あれ……?? やけに素直だな? あっ!! もしかして自分の中の俺への気持ちに気付いちゃった!？」

不思議そうにしていたのは一瞬だけですぐに嬉しそうに麦野に尋ねた。

「……………ええ」

「マジかよっ……………!!? でも、やっと麦のんに俺の気持ちを通じたんだね! 聞かせてくれ! 麦野の気持ち!」

その問いかけに麦野は小さく頷く。それに天野は驚きの声をあげることが、すぐに切り替えて真剣な様子で再び尋ねる。

「でっ、でも……………」

「でも?」

麦野は天野と目を合わせようとしない。それに言いよどんだ様子で言葉が続かない。それでも天野は続きを聞くために麦野を促す。

「……………はずかしい」

麦野はよつやく目を合わせたかと思うと、顔を真っ赤にして蚊の泣くような声でそう言った。恥ずかしそうにしている麦野に天野は膝から崩れ落ちる。それでも麦野を落とさないように腕だけは動かさ

ないのは流石と言える。

「……………だっ、大丈夫だから……………。安心して、俺の気持ちは決まってるから」

本来ならこれで十分答えと言えるが、天野はそれでもちゃんと答えを聞きたいのか続きを促す。

「……………うん」

麦野の顔は、いまだ赤いままだが覚悟を決めたのか小さく頷いた。そして。

「私、貴方のことぶち殺したい」

「ああ！俺もお前をぶちころ　　って、違う!？」

麦野の答えに全力で答えようとした天野だが、予想外の答えにツツコミを入れてしまう。麦野はそれが可笑しいのか天野の腕の中で必死に笑いを堪えている。笑いを堪える麦野に天野は文句を言う。そして麦野にやたら似た声で小芝居を始めた。

「違うでしょ！ここは

麦「私、貴方のことが大好きなの」

天「ああ！俺もお前のことが好きだ！いや、愛している！」

麦「私も愛してる！でも、ゴメンね……………。私、素直になれなくて

……。貴方のこといっぱい傷つけちゃったね。こんな私だけど、愛してくれる……?」

天「当たり前だろ。俺は何時だってお前のことを愛しているぜ」

麦「天野……」

天「麦野……」

そして、二人は見つめ合い。どちらともなく唇をちかじゆけ
いふあい、いふあい」

訳の分からないことを、いきなりのたまわる天野の両頬を麦野が思いつきり引つ張る。

「誰と誰がキスするのかにゃーん?」

顔こそ笑っているが、目が笑っていない麦野が頬を引つ張ったまま天野に尋ねる。

「おれふお、むふいの……。ぢゅ　いふあいつー!」

天野は答えて、そのまま唇を近づける。しかし麦野がゴムパツチンのように頬を離れた所為で天野の頬から、バチン、と。頬がだす音とは思えない音を出す。

「チツ……。これじゃあ話が進まないじゃない……」

「話って、なんだっけ……?」

苛立ったような様子で舌打ちした麦野に天野は首をかしげる。そんな天野に更に苛立った様子の麦野がもう一度、舌打ちしてから説明した。

「なんでお前がココいるのかって聞いてんだよ」

「ん？いやいや。実はあの「つるぺた」第三位は俺の生意気な後輩の想い人でね。死なれちゃ困るんで、助けにきたんだけど……。必要なかったかな……。？」

ようやく麦野の問いに天野が答える。

「……それは、私が弱いつて言いたいのかなーッ！！」

馬鹿にされたと感じた麦野が、答え次第では許さない、と。言うように再び心臓に照準を定める。しかし、天野はすぐにそれを否定する。

「違う違う。ただの戦闘ならともかく、殺し合いになれば麦のんの方が有利だろ？」

「……………」

天野は確かめるように、麦野の方を見るが麦野はそれに答えない。しかし天野はさらに言葉を続ける。

「それに順位は純粋な戦闘力だけじゃなくて、希少価値とか、応用性も含まれてるし……。なんでもありの戦闘だけにしぼるなら、実際、麦のん方が強いと思うぞ」

予想外のタイミングで、自分の矜持やプライドをくすぐる天野の言葉に、麦野はバツが悪そうに舌打ちする。

「……………チツ」

そんなバツが悪そうにする麦野を天野は嬉しそうに眺めている。

「……………『実験』の方は、何とかしてやらないの？お前なら『第一位』に勝てないまでも、負けることはないでしょ？」

天野が麦野をいつまでも眺めたままなので、しびれを切らした麦野が話題を変える。

「うっん？知ってたの……………？」

麦野のその言葉に、天野は若干驚いた様子で訊き直す。

「ふん。訳の分からない「依頼」だったからね。一応、調べてみたら出てきただけよ……………」

訊き直された麦野は詳しく説明する。

「そっか。いやー、あの第三位が麦のんみたいに、素敵なレディだったら一も二もなく救いだしたいんだけどねえ」

「……………本当に、そんな理由なわけ……………？」

当たり前と言わんばかりの天野に、麦野はいつでも逃げ出せるように体勢を整えてから尋ねる。

「あはははっ、冗談冗談。俺もこの学園都市の『闇』の中にいる身だしね。下手に手を出すと悪化しかねないし……。まっ、どっちにしるあの第三位を救いだすなら適役がいるんだよ。「不幸な王子様」がな」

「何よそれ？「白馬の王子様」でしょ？普通」

冗談冗談、と。笑ってから天野がそう言った。笑っている天野に麦野が疑問を投げかける。

「んにゃー。「不幸な王子様」で、あってるんだよ。この場合はなあ
おおっ、アレかな？」

ふたりが話している間に施設から出ていたので、天野が辺りを見回す。すると、近くに一台のキャンピングカーが止められていた。

「ん？確かにうちの移動用のやつね」

天野が確認を取ると麦野がそれを肯定するように頷いた。

「おーい。絹旗ー、フレンドー」

更にキャンピングカーの近くに、二つの人影を見つけた麦野がその二人を呼ぶ。呼ばれたのは、麦野と同じく統括理事会直下の実行部隊の一つ『アイテム』に所属する絹旗最愛とフレンドーセイヴェルンだ。二人は呼ばれたことに気付くと、すぐにこちらにやってきた。

「遅かったですね麦野。超問題でもありました、か　　ッ」

「麦野ー。結局なにながあつた　　ッ」

近寄ってきた二人は天野に抱えられている麦野を見ると、すぐに警戒するように天野との距離を取る。

「……どちら様ですか？超名乗ってください」

「……絹旗の言うとおり、どこのどいつって訳よ」

天野は警戒する二人に気まずそうに麦野を見る。しかし麦野は目を合わせようとはしない。どうやら自分で解決しろ、と。言う事らしい。

「うーん？天野、って言っても分かんないだろうから……。ここは『バットエンド活地獄』って名乗れば通じるのかな？」

「ッ！？」

その一言で絹旗とフレンドは、一瞬で臨戦態勢に入る。『バットエンド活地獄』。この一言には、学園都市の『闇』に所属する、所謂、プロのプレイヤーとも言える彼女たちを、一瞬で臨戦態勢にさせるほどの破壊力が秘められていた。

「ありやりや？？何でこんな警戒されてるの？」

「当たり前でしょ。『闇』の『バットエンド活地獄』って、言えは警戒されるに決まってるじゃない……」

何故警戒されているのか、理解できていない天野に麦野が呆れたように言った。

「んー。どうやってたら誤解が解けるかなあー」

と、天野が頭を悩ませていると。

「大丈夫だよ。きぬはた、ふれんだ、あまのはいい人だから」

『アイテム』の最後のメンバーである滝壺理后が現れてそう言った。

「たつ、滝壺さん！？体は超大丈夫なんですか……！？」

現れた滝壺の顔は青ざめていて、かなり体調が悪そうだ。そんな滝壺に絹旗が駆け寄り、その体を支える。そんな滝壺と絹旗を護るように、フレンダが天野と滝壺たちの間に入る。

「……麦のん。また理后に無理させただろ。確かにこの学園都市の『闇』の中にいるんだ。使うな、とは言えないけど、ちゃんと考えてやれよ」

「……………わかってるわよ」

そこで天野が麦野を降ろす。その麦野は怪我していた足を庇うように、降りようとしたが、なぜか足の怪我が無くなっている。他にもあった怪我も無くなっている。

「まったく相変わらず、訳の分からない能力ね」

麦野の言葉に返事をせず、天野は滝壺の方へと近づく。

「結局、相手があの『等活地獄』バットエンドでも、ここを通す訳にはいかない

って訳よ」

そんな天野をフレンドが止めようとする。

「大丈夫よ。こいつは敵じゃないわ」

「麦野……？」

「大丈夫だから」

止めようとするフレンドに、麦野が声をかける。それに首をかしげるフレンドだが、もう一度麦野に念を押されたので、渋々天野に道を譲る。

「……あまの、久しぶりだね」

「ああ。久しぶり。ちょっといいか？」

苦しそうな滝壺だが、近寄ってきた天野に薄く笑みを浮かべる。天野はそれに返事をしてから、滝壺を支えている絹旗を確認を取る。絹旗も渋々と言った様子で頷く。頷いたのを確認してから、天野は滝壺の額へと手を当てる。

「前にも説明したと思うけど、これは応急処置だ。体の中に溜まってしまった『体晶』そのモノは取り除けない。上辺にある『体晶』を掬い取ってるだけだ、だから使うなら気をつけて使ってくれ」

天野は滝壺の額に触れたまま話す。天野が話している間、滝壺の顔色が次第に良くなっていく。

「……ありがとう、あまの」

お礼を言った滝壺の顔色は、先ほどと打って変わって良くなっている。

「大丈夫なんですか？超辛そうでしたが……」

心配そうに絹旗が滝壺に確認をとる。

「大丈夫だよ。きぬはた。あまのおかげでだいぶ良くなったから
顔色のよくなった滝壺は、それだけ言うとな絹旗の支えなしで立った。
それに安心したのかフレンダが滝壺たちの近くへやってくる。」

「結局、なにがどうなってる訳よ？」

「聞くだけ無駄よ。こいつ、自分の能力についてちゃんと話したこ
とないから」

フレンダの疑問に、同じく近くにきた麦野が答える。

「ひどいなあー。麦のん。俺は何時だって真剣だぜ？」

麦野の批評を気にした風もなく、天野が言った。と、そこでフレン
ダが急に大きな声を出す。

「ああっ！ーむ、麦野……。わっ、私……。その……」

「……そう言えば、オシオキ忘れてたわね。もちろんわかって
るでしょうね？」

「ひっ!?!」

フレンドは麦野のその言葉に顔を引き攣らせる。日頃ともに行動しているフレンドは、こういう時の麦野がどれだけ恐ろしいかを知っている。

「今回はお前の所為で大変だった訳だし……。どんなオシオキにしようかしら?」

「うっ、うめんなさいって訳よ」

恐怖に顔を引き攣らせながらも、フレンドは必死に麦野に謝る。麦野はそれをいたぶるように考え事をするように、顎に手を当てて笑っている。その様子を残りの『アイテム』のメンバーが見守るようにつめて見ている。

「決めたわ」

「「「……………」」」

フレンドは最後の審判を待つかのように、目を瞑って祈るようになっている。そして麦野が下した審判は。

「みんなでご飯でも食べに行きましょう。もちろんフレンドのおいでね」

「「「入っっっ」」」

麦野のその言葉に『アイテム』のメンバー全員が理解できない、と言った表情になっている。しかし、天野はこうなる事がわかっていたかのように、その顔に笑みをたたえ麦野を見ている。

「ふふつ。まったく、麦のんってば照れ屋さんなんだからー」

「う、うっさいわね。…………お前でストレス発散しちゃったから、怒る元気がないだけよ」

「まっ、麦のんがそう言うなら、それでいいけどー」

天野に茶化された麦野は反撃するが、天野はそれでも満足そうに笑っているだけだ。

「ほら。私、先に行ってるからさっさと来なさいよ」

それだけ言うと、麦野はひとりでキャンピングカーの方へと行ってしまふ。天野はその麦野のあとを追いかける。

「せっかくだから俺も混ぜてよ」

「ダメよ。どうしても、って言うなら自分で払いなさいよ」

「えー。ひどいなあ麦のん」

そのまま二人はキャンピングカーへと乗り込んでいってしまった。残された三人は呆然としている。

「…………結局、『バットエンド等活地獄』って何者って訳よ？」

「それは知りませんが、麦野がやけに超機嫌がよかったですね？」

「うん。むぎの、楽しそうだった」

それだけ言うと三人は顔を見合わせる。が、いつまでも顔を見合わせていても意味がないので、麦野の機嫌が悪くなる前に、キャンピングカーへと向かった。

『御使墮し?』

海を眺めながら上条当麻は頭を抱える。彼がなぜ海にいるかと言うと、最近とある『実験』に首を突っ込んでしまった為だ。担任である月読小萌の計らいで、事態が沈静化するまで海で遊んで来い、と言うことらしい。

「一体なにがどうなってんだよ……」

しかし上条が頭を抱えているのは別のことが原因だ。上条の視線の先には、なぜか大人水着バカを着て母親気取りなインテックスいそつさつと、これまたなぜか媚びキャラいもつとになった御坂美琴がスクール水着を着て遊んでいる姿がある。ちなみに、獣のような目でインテックスを見つめている、上条刀夜ロリコンの姿があるのだが、上条はその現実から目を背けることにした。

「一体なにがどうなってんだよ……」

答えが返ってこないとわかっていても上条はもう一度呟いた。

「そりゃあ、こっちのセリフだ俺の敵」

しかし、予想に反して上条の呟きに反応があった。だが、上条は空耳だと思ったのが、普通に会話を続けようとする。

「いやいや。俺のセリフだから……って、なんでお前が
ゴ
フェー!？」

普通に会話を続けようとした上条だが、途中で異変に気づいて大声をあげそうになる。だが、それより先に上条の頬に拳が直撃した。

「やっぱり、俺とお前は敵対する宿命らしいようだな？俺の敵」

殴り飛ばされた上条は殴られた頬を擦りながら立ち上がる。

「……天野。何でお前がここにいるんだよ。それにこれは何のつもりだ……！？」

立ち上がった上条の視線の先にいたのは、上条のクラスメイトである天野だった。上条は警戒しながら天野を睨みつける。状況は理解できないが、どうやら天野が上条に対して激怒しているようだ。

「わかってんのか？お前の所為で俺の夏休みの予定は総崩れなんだよ……！！」

「はあ??？」

天野は上条に指を突きつけてそう言った。あまりに予想外な言葉に上条は素っ頓狂な声をあげてしまう。

「『レベルアップ幻想御手』の後処理が終わって、ようやく愛穂さんと時間を作ってデートの予定だったのに……！！なにが『錬金術師』を倒すから手をかせだ！！」

しかし天野はそんな上条にかまわずひとりで話を続ける。

「いや、それスタイルだし……」

意図せず漏れた上条の呟きに天野の眉が一気につりあがる。

「黙れ！関係しただけで共犯じゃあー！おかげで愛穂さんスッゲー機嫌悪くなつて大変だつたんだぞー！」

「……たつ、大変だつたんだな」

天野のあまりの剣幕に上条は若干、引きながら同意する。だが、天野はそれだけでは気が済まないのか更にたたみ掛ける。

「それだけじゃない！次はあの堅物の美偉を何とか口説き落として、二人で遊びに行くはずだったのに、『白セロリ』とのいざこざに巻き込みやがつて……！！！」

「悪かつたな……って、お前戦つてなかつたじゃん！？」

気迫に押されそうになる上条だが、今度は天野に異議を申し立てる。

「はあ！？おいおい。じゃあ聞くが、お前が常盤台の寮に入るときに、あの寮監さんから逃がしたり、戦闘のあとお前を担いで病院まで運んだのは、どのどなた様ですかーっ？言ってみろ、言ってみやがれー！」

「ははー。アナタ様です。アリガタヤー」

上条のせつかくの反撃も、天野はすぐに叩き伏せる。わりと面倒くさくなつてきた上条は棒読みで天野の功績を讃える。と、言うよりこれだけ叫んでいても、何でインデックス（？）達は気付いてくれないのかなー。とか思つて海辺の方を遠い目で見つめる。もちろん

事件で記憶喪失の上条はわからないが。幕末剣客ロマン女が立っていた。

「……まったく、ヘタクソな演技をして。やはりあなたが犯人なのでは……！？神裂です。神裂火織。イギリス清教ネセザリウス必要悪の教会の魔術師。一度まみえただけとはいえ、よもやこんな短時間で顔を忘れたとは言わせませんよ」

幕末剣客ロマン女は神裂と名乗った。と、言うよりこのヘンテコなサムライ女はどうやら上条の知り合いらしい。神裂は上条が何かの犯人であると事を疑っているらしく、その腰に差してある日本刀に手をかける。

「もー。火織は好戦的だなー」

「カミヤンを見つけるなり、いきなりブツ飛ばした男のセリフじゃないぜい……」

そんな神裂を揶揄するように天野が言った。そんな天野に今度は土御門がツッコミを入れる。

「何を言ってるんですか土御門。私も「彼」も全力で問題に当たっているだけです」

神裂はやる気のなさそうな土御門に文句を言う。上条は神裂が「彼」、と言うときの言葉にやけに棘があったような気がした。どうやらそれは土御門も感じ取っていたようだ。

「いやー。女の嫉妬は怖いもんだにゃー」

「なっ！？しっ、嫉妬などしていません！そもそも「彼」が誰にちよつかいを出そうが私には関係ありません！！そっ、そんなことよりあなたは魔術師としての自覚が足りません！！」

不利な状況を感じ取った神裂は、話を逸らすために逆に土御門に文句を言った。………神裂の文句の中に上条にとっては聞き捨てならない言葉があった。

「おい、今なんて言った？魔術師だっけ？」

「そーゆー事。俺も『必要悪の教会』^{ネセサリウス}の一員だっけ事だぜい」

上条の疑問を土御門は即座に肯定する。それでも納得できない上条が食ってかかる。

「ちょ、待てよ。なんだそりゃ？お前が魔術師だっけ？」

「おっよ」

やはり今度も土御門は頷いた。

「まっ、これからその辺も含めて詳しく説明してやるぜい」

「って、訳だぜい。わかったかカミヤん？」

「通り、土御門から説明を受けた上条が話をまとめる。」

「つまり、原因不明の大魔術『エンゼルフォール 御使墮し』の所為で、『天使』が落
つこちて来たと……。で、その所為でみんなの『中身』と『外見』
がバラバラに入れ替わっている。って、事でいいのか？」

「その通りだぜい」

要点をまとめて話す上条を土御門が肯定する。

「んで、実は『必要悪の教会』^{ネセサリウズ}のスパイだったお前と、神裂は運良
く難を逃れたと」

「まあー。本当は半分ぐらい術に吞まれちまってるんだけどにゃー」

土御門は上条の話の話を捕捉するようにそう付け足した。話をなんとなく理解した上条だが、そこで首をかしげる。

「いや。話は大体わかったけど……。何で俺が疑われてるんだよ？」
首をかしげた上条が疑問を投げかける。その疑問に答えたのは説明の最中ずつと上条を、親の仇を見るような目で見ていた神裂だった。

「それはこの異変を調べた結果、あなたが『歪みの中心』であることがわかったのです。にもかかわらず、『歪みの中心』であるあなたは、なぜか『御使墮し』^{エンゼルフォール}の影響を受けていない」

「そりゃ当然カミヤんが怪しまれるぜよ。世界中にコンピュータウイルスをばら撒くクラッカーだって、自分のパソコンにだけはウイルスを流さないもんだぜい」

疑問を抱えていた上条に、神裂と土御門が答えを告げる。

「はい！？ちよつと待てよ。んな事言ったら、天野だって変化してねえだろうが」

神裂と土御門が変化していない理由を聞いていた上条が、唯一の例外である天野について言った。

「いやーカミヤん。天のん場合はカミヤんと正反対、いや、対極と言っても過言ではないんだにゃー」

「対極？」

続いている疑問に土御門が解説を始める。

「カミヤんを『歪みの中心』とするなら、天のんは『歪みの空白』」

って感じだにゃー」

「??？」

それだけでは理解できない上条は首をかしげる。そんな上条を見て土御門が更に説明する。

「さっき説明したように『エンゼルフォール御使墮し』を回避するには『距離』と『結界』が必要不可欠なんだにゃー。にも関わらず、天のんは何の影響も受けていないんだぜい。しかも天のんはカミヤんと違って『イマジンブレイカー幻想殺し』を有していない」

「まるで「彼」だけが、世界から切り離されているようです。故に「彼」を中心とした空間を『歪みの空白』と言う事にしたのです」と、神裂が土御門の言葉を補足説明する。そして続けて神裂が言った。

「しかし、調査の結果。残念ながら「彼」には関係ない事がわかりました。理由はわかりませんが、何らかの理由で『エンゼルフォール御使墮し』を逃れたとしか言えません」

神裂はとても残念そうに言った。余程この『エンゼルフォール御使墮し』を解決したらしい。

「……………じゃあ、天野ってなんでここにいるの？」

上条の口から漏れた疑問に天野がいち早く反応した。

「上条くん。楽しい楽しい授業の時間ですよー」

『悪魔』がいた。それが上条の感想だ。もしゲームの中でよく見る『悪魔』が出てきたら、目だけは笑っていないこの笑顔で何かしらの『契約』を迫ってくるだろう。怯えている上条を気にせず天野が言葉を紡ぐ。

「はい。今朝のことです。俺が、ようやく機嫌の直った愛穂さんとデートの約束してました。はい！ここで問題です。『エンゼルフォ御使墮し』[↓]が起きた所為で起きた事は、な・ん・で・しょー？」

「……『中身』と『外見』の入れ替わり？」

何とか答える上条に天野は『悪魔』の笑みを浮かべたその顔に更に深い笑み浮かべる。

「はいはい。正解です。ではでは、そんな状況で待ち合わせにきた愛穂さんは、どうなってるでしょうか？」

「……………」

そこで答えられず上条が言い淀む。そんな上条に天野が顔を引き攣らせる。

「筋肉隆々のおっさんだぞこの野郎！！」

「…………マジで」

叫んだ天野の言葉に、今度は上条が顔を引き攣らせる。

「お前にわかるか…………！？せっかく楽しみにしていたデート当日、

待ち合わせの場所に行ってみれば、いつまで経っても愛穂さんが来ない。それどころかいきなり筋肉隆々のおっさんに話しかけられたら、誰だってブチ切れるわ!！」

「おい。それって……………」

上条は顔を引き攣らせたまま尋ねる。それに天野は膝から崩れ落ちる。そしてそのまま地面へと拳を叩きつける。

「誰だって、アレが愛穂さんだと思わねえだろうが! ! やべーよ! やべーよ! ! マジやべーよ! ! ! 愛穂さん大激怒だよ! ! ? 今度こそ完全にヘソ曲げちゃったよ……………! ! 土御門が助けてくれなかったら100パーセントやられてたよ! ! ?」

天野は、唸りながら打ちひしがれている。土御門はそれを気にせず上条へと話しかける。

「いやー。つうことで、カミヤんと天のんには『エンゼルフォール御使墮し』の『犯人』探すと、儀式場の魔法陣破壊に付き合ってもらうにやー」

「何が、つうことで、だよ。……………でも、まあ、この状況をほっとく訳にはいかないしな」

上条は土御門からのお願いを渋々ながら了承する。了承の内容には天野も入っているのだが、それを気にせず同意する。

「まずは上条当麻、あなたの周辺から探るべきでしょう」

同意した上条へと何故だかイライラした視線を天野にぶつけたまま神裂が意見を述べる。

「って、言う事でさっそくカミさんの周辺の調査行ってみるにゃー」
それに従って土御門を先頭に上条、神裂、があとに続く。その場に
残された天野が「俺は悪くない。俺は悪くない」と虚ろな瞳で呟き
続けている。

『御使墮し？』

かくして『御使墮し』の『犯人』および魔法陣を見つける事になった。並行して探すには、人員が少ないので『犯人』だけにしぼって探す事になったので、まずは上条の周辺の人物から調べる手筈となった。その途中で一つの問題が浮上した。

「あらあら、物腰も丁寧で。『大柄でがっしりした人だから』、おばさん最初はもつと違うイメージを抱いていたのただのだけど」

『エンゼルフォール』の所為でインデックスの姿をした上条の母、上条詩菜がそう言った。その言葉に神裂の肩が、びく、と動いた。

「けど、その言葉遣いってちょっとニュアンスずれてるわよ。だってそれじゃ女言葉っぽいもの。『そんないいガタイしてるなら』、少しずつでも男言葉に直していかないと。仕草もちょっとだけ『女っぽいよ』?」

続いて発言したのは御坂美琴の姿をした上条の従妹、竜神乙姫だ。その言葉に今度は神裂の頬の筋肉が、びくびく、とわずかに引きつる。

「こらこら、やめないか二人とも。言葉なんてものは正しくニュアンスが伝わればそれでいいんだ。おそらく『彼』は日本人の女性に

言葉を教わったからこうなっただけだろう。『見た目がどうだろうがそんなものは関係ない』」

最後に自覚のない上条刀夜の言葉に神裂が首を垂れる。浮上した問題。それは神裂の姿が同じく『必要悪の教会』ネセサリウス所属の魔術師、ステイル・マグヌスに見えるのだ。『御使墮し』エンゼルフォールを何とか回避した神裂と土御門だが、完璧とは言えず彼らの姿は、他の人から見ると別人に見えるのだ。

「……………っ」

そんな神裂を見て上条が必死に笑いをこらえている。笑ってるのがばれると、神裂にどんな事をされるか分からないので、自分の足を抓ってでも笑いをこらえている。

「……………うう」

天野は部屋の隅の方で憂いの声をあげている。理由はインデックスの姿をした上条詩菜を見たからだ。せつかくの年上にもかかわらず、現れたのは隣に住む、大食いシスターの姿になっている『上条詩菜』とじっえだった。その所為で意気消沈しているのだ。それでも怒鳴りつけることがないのは、中身が年上だからだろう。ちなみに土御門は、『御使墮し』エンゼルフォールが効いている人間から見ると、超美形アイドルの『一』ひとひに見えてしまうらしく、見つかる大騒ぎになるため別行動をとっている。

「……………ぶはっ！あははっ！あはははははっ！！」

ついに我慢できなくなった、上条が笑い声をあげた。瞬間、神裂がゆらりと立ち上がった。そして大笑いをしている上条と、部屋の隅

で憂いている天野の襟首を掴んで。

「……………(ほう。なるほど、それがあなたの意見ですか。そう)」

小声で話しながらふたりを、ずるずると。引きずっていく。

「(な、ちよっ……………どこへ!?シメられますか!?あれ、そっちは風呂場なんだけど……………まさかっ!米国の刑務所にはかつて冷水シャワーを延々と浴びせて体温を奪う拷問があったと伝え聞くがこれいかにーっ!?)」

完全に自業自得な上条が小声で叫ぶが神裂は返事をしない。そしてそのまま天野と上条は、ずるずると。引きずられていく。

二人が引きずられてきたのは、上条たちが泊まっている民宿のお風呂だった。神裂はまずはじめに上条をこっ酷く『教育』を施したあと、こんな事を言い出した。

「こんな時に何ですが、トラブル続きでロクに湯浴みもしていない状態なのです。なのであなた方は私が入っている間、この見張りをしてもらえませんか?」

「……………」

「ん?」

未だ意気消沈の天野はブツブツと何かを言っているが、『教育』から復活した上条は一瞬、首をひねるが神裂の状態を思い出してすぐに頷いた。神裂は今傍から見れば男性に見えるのだ。このお風呂は男女別ではなく、男が使っている時は男湯になり、女の時は女湯、と。言った感じなので神裂が入っていると間違つて他の男性が入ってくる可能性があるのだ。

「……………わかったよ」

先ほどの『教育』でふざける危険性を知った上条は、余計な事は言わずすぐに頷く。それを受けて神裂は満足そうに脱衣所の方へと入っていく。しかし、入る直前に立ち止まり上条達、特に天野の方を見てこう言った。

「……………覗かないでくださいね」

「なっ、なに言ってるんだよ!?!」

「……………」

上条は慌てて否定するが、魂が抜けたような状態になっている天野は首を小さく縦に振った。そんな天野を見て、なぜか苛立った様子の神裂は「それでは頼みましたよ」と言つて今度こそ脱衣所の中へと入つていった。

「カミヤん、天のん。こんなトコで何やってんだぜーい?」

タイミングを見計らつたかのように、神裂と入れ替わりで土御門がやってきた。

「おい、お前周りから見たら超美形のアイドルに見えるんだろ」

「なに、バレなきゃ良いんだにゃー。これも土御門さんの基本概念でね」

上条は土御門を注意するが、土御門は気にした風もなく答えた。そんな土御門に上条はやや真剣に尋ねた。

「つーか。何しに来たんだ？ 『エンゼルフォール御使墮し』^{エンゼルフォール}について何かわかったのか？」

その問いに土御門の表情に真剣味がます。そこで緊張したのか上条が、ごくり、と。喉を鳴らす。

「ざざん！夏のドキドキ神裂ねーちん生着替え覗きイベント！」

「なっ！？正気かお前！！」

次の瞬間、とんでもない事を言い出した土御門に、緊張していた上条がずっこける。だが、すぐに持ち直し土御門を問いただす。

「……見て見てカミヤん。最近のケータイってカメラ機能がついてるんだぜい」

「聞けよ！ってかマズイよ、あの幕末剣客ロマン女は絶対に冗談通じねーって！そんなのバレたら、なんか一子相伝のすごいので真っ二つにされるに決まってるって！」

「……、逆説。リスクがなければ覗くのかにゃー？」

「……、」

「……神裂ねーちゃんはよう、脱いだらきつとすごいんだぜ」

ごくり、と。上条は、今度は別の緊張で喉を鳴らす。それを好機と見た土御門がたたみ掛けようとするが、それを遮るように今まで蹲っていた天野が、バツと立ち上がる。

「ほら見るカミヤん。相手がねーちんともなれば、撃沈していた天のんすら動き出すんだぜい？」

だがそれに反し天野は脱衣所の入り口を遮るように立つ。

「どう言つつもりだにゃー？」

意外そうに尋ねる土御門を見据えて天野が鼻で笑ってから言った。

「ふつ。わかってないな。俺はレディの味方だぜ。レディの敵は俺の敵だ！それにどうせ見るなら、ベットの上で見たいんだよ！！」

後半は欲望がダダ漏れになっていたが、それでもまだ理性は保てているようだ。

「にゃー。さすがだぜい天のん。だが、ここは譲れないにゃー」

二人はさながら西部劇の決闘のシーンのように向かい合う。おいてきぼりを食らった上条だけが、場違いな雰囲気を出している。

「ほざけ。つるぺたにしか興味のないシスコン軍曹がっ！お前には火織の素敵ボディの価値はわからん！！」

「キサマ！その名で俺を呼ぶな！大体何の根拠があつてそんな事を言う！？」

どう見ても取り乱し、動揺した様子で叫ぶ土御門を、天野は軽蔑するような目で見る。

「あまいな。自分の性癖すら認められない奴が、この戦場に立つとはな」

「いやいや！問題はそこじゃなくて、リアルにやってるの、って話だろうが！」

おいてきぼりを食らっていた上条はこれ幸いと、動揺した土御門へと追撃を行う。

「やつ！？や、ややややヤルって、なっ、何を？ナニを！？」

今度こそ完全にぼろを出した土御門に上条の時が止まる。

「え、なに？なにその動揺っぷりは？ちよつと待てよ。あれ土御門さん、あんたギャグじゃなくつてまさか本当に……？」

「やめる探るなそれ以上一言でもしゃべりやがったらぶつ殺して差し上げるぜいっ……！」

上条の襟を掴み黙らせようとする土御門。そんな土御門を見て天野は残念そうに肩を落とす。

「ふん。その程度で動揺するレベルでは、俺と対峙することなどで

きん。……俺の相手になるのは青髪ピアス、やはりお前だけのようだな」

などと、かなりどうでもいいやりとりを繰り返していると、こちらへ来る足音が聞こえた。上条がやばい、と。思うより早く土御門は忍者のように物陰から物陰へと移動してどこかに消えて行ってしまった。

「やつほいおにーちゃん。それに天野さんも。こんなトコで何やってるの?」

「あらあら。男ふたりで熱くナニを語りあってたのかしら」

そしてやってきたのは、インデックスと御坂美琴いとこだった。インデックスを見た瞬間、天野がその場に崩れ落ちる。「人妻とらうえ」と言う属性に余程期待していたようだ。

「……なっ、なに言ってんだよ!？」

さすがに覗くだの、覗かないだの話していたとは言えないので上条が勢いで誤魔化する。誤魔化している上条を気にせず御坂が脱衣所の方を見て行った。

「……、おにーちゃん。誰が入ってるの?」

「え、まあ。うん。俺たちがここにいるのは見張りなんだけど」

「見張り? わっつけ分かんないな!。そんなの別にいいじゃん。中にいるの、どうせおにーちゃんの友達でしょ。だったら一緒に入っちゃってよう」

そこで上条が御坂の言葉に絶句した。上条は忘れていた。今は『御^{エッ}使^{ゼル}堕^フし』の所為で、神裂火織はステイル^ルマガヌスに見えてしまうのだ。

「ちよ、ちよーつと待った！誰も風呂に入るとは言っていない！まして友達と一緒に入らなければならぬルールもんはないっ！別にアイツが出てくるのを待っても　　ッ！！」

上条が必死に御坂の動きを止めようとするが、御坂はそんなものはお構いなしに脱衣所へと押し込もうとする。それ従ってインデックスも崩れ落ちている天野を押し込もうとしているが、一応、相手が年上なので天野は抵抗出来ない。

「えー。二人も待つてたら時間がかかるよ。別にいいじゃない、『男同士』なんだから、さっさと一緒に入っちゃってよう」

「なぶあつ！？つて待て！ちよ、ホントに待　　ああア嗚呼
！！」

「はいはい、ごめんよごめんよー」

情け容赦なく脱衣所へと放り込まれる上条と天野。

放り込まれた上条の目に飛び込んできたのは　　。

指だつた。

「イツ、イツ
テエエエええエエ

ツ???!?!」

叫ぶ上条だが、その上条に馬乗りになつた天野が上からその口を塞ぐ。

「ふうー。危なかったー。これで火織の裸体は守られたぜ」

天野は上条の口を塞いでいたうち片方の手を、離して汗をぬぐう。その間にも上条が青くなっているのだが天野はそれに気づいていない。

「よかったな。火織」

満足そうに言っつて、天野は文章で表現してはいけない格好の神裂の方を見た。

直後、黒鞘の一閃が天野に直撃した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8088v/>

とある男のハーレム至上主義

2011年10月14日00時44分発行